

安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター

2019 年度 事業報告書



Asama Yatsugatake Panorama Trail
—Douraku Orugan (Dokusyo-no-mori)



「自然体験活動は、 子どもたちの創造力やチャレンジ精神を育む」

公益財団法人 安藤スポーツ・食文化振興財団

理事長 安藤 宏基

安藤スポーツ・食文化振興財団は、日清食品創業者 安藤百福が掲げた「食とスポーツは健康を支える両輪である」の理念のもとに、青少年の心身の健全育成と食文化向上のための公益事業を行っています。日本陸上競技連盟主催の「全国小学生陸上競技交流大会」等の後援事業、新しい食品の開発に貢献する研究を支援する食創会の「安藤百福賞」表彰事業、大阪池田と横浜の2つの安藤百福発明記念館（愛称：カップヌードルミュージアム）運営のほか、1983年の財団設立当初から、自然体験活動の普及に取り組んでいます。

2002年からスタートした「トム・ソーヤースクール企画コンテスト」では、自然体験活動にとって大切な「企画力」の向上を図るために、全国からユニークで創造性に富んだ自然体験活動の企画案を公募して選考の上、50団体に実施支援金10万円を贈呈しています。さらに、支援団体から提出された実施報告書を審査し、優秀団体を表彰しています。これまでの18年間で、全国820団体を支援し、25万人以上の子どもたちが体験活動に参加しました。

2010年5月、長野県小諸市に「安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター」（略称：安藤百福センター）を設立し、自然体験活動を推進するための人材育成や、アウトドア活動の普及・促進に取り組んでいます。また、自然体験活動は、どのフィールドでも「歩く」ことが基本であると考え、特定非営利活動法人日本ロングトレイル協会と連携し、ロングトレイルの普及・振興に取り組み、「歩く文化」の醸成を図っています。そして、2018年度より九州から北海道まで日本列島を一本道でつなぐ「JAPAN TRAIL プロジェクト」を推進しています。

2016年から、新たな国民の祝日として「山の日」（8月11日）が制定・施行されましたが、私も微力ながら「全国山の日協議会」（谷垣禎一会長）の副会長として活動に参加させていただいております。祝日「山の日」の施行が自然体験活動やロングトレイルのより一層の普及・振興につながることを期待しています。

今後とも引き続き、ご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

安藤百福記念
自然体験活動指導者養成センター

2019 年度 事業報告書



MOMOFUKU
ANDO
CENTER

安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター

2019 年度 事業報告書

CONTENTS

寄稿

2019 年度 安藤百福センター事業概要

～安藤百福センターの利用状況とアウトドアズのトレンドを探る～	中村 達	6
日本人の「遊び」が「文化」になる日	節田 重節	19
中山道てくてく旅		
～欧米豪の人々は、なぜテクテクで馬籠峠を越えるのか？～	藤原 義則	28
英国人の散歩に見る「歩く文化」		
～いち日本人主婦が見た英国流ウォーキング～	セツダ・シノ	35
安藤財団が行う「ロングトレイル振興」の取り組みについて	荒金 善一	43

事業報告

事業総括	50
第7回ロングトレイルシンポジウム	51
ロングトレイルのつくり方講座	55
ロングトレイルハイカー入門講座	56
大人のトレイル歩き旅講座	67
みんなでダイヤモンド浅間を見に行こう！	83
みんなでパール浅間を見に行こう！	86
子どもクライミング教室	88
森の中を歩いてトレイルノートをつくろう！	90
小諸ツリーハウスプロジェクト「信州冒険ものがたり」	92
事務局スタッフ近況	96

卷末資料

マスコミ掲載	98
安藤百福センター 運営組織	102
2019 年度 主催・共催事業一覧	103
2019 年度 研修利用状況	104
編集後記	104

寄稿

2019 年度 安藤百福センター事業概要

～安藤百福センターの利用状況とアウトドアズのトレンドを探る～

中村 達（安藤百福センター センター長）

概況

2019 年度のセンター利用状況は、ほぼ前年度と同様であったが、単なる貸し施設的なものから、自然体験活動やアウトドア・アクティビティを普及・促進させるような目的を持った利用が増えた。また、センターの機能や人材を活用した、いわゆる自主企画事業を積極的に展開し、センター本来の事業目的に則した活動が増加した。例えば、浅間・八ヶ岳パノラマトレイルを利用した事業（後章を参照）は延べで 10 回開催し、241 人の参加者があった。これらの事業は、いずれもキャンセル待ちという状況であった。



秋のトレイル講座



ツリーハウスイベント

なお、事業の内容と実施の報告は HP(momofukucenter.jp)で公開し、他団体などの参考となるように努めている。

毎年の恒例事業となっている「ツリーハウスイベント」は 11 月 3 日に開催し、近隣住民のほか首都圏などからも来場者があり、約 2,000 名の参加者を得て盛況であった。このイベントは地域住民から高い評価があり、今後も継続を望む声が多い。



クライミング・タワーは大人気

また、2018年に設置したスポーツ・クライミングのためのクライミング・タワーを利用した教室を2回開催し、約70名の児童が参加した。いずれの教室も児童を対象とするもので、募集の開始とともに定員に達し、キャンセル待ちが発生するという状況であった。この教室は注目度も高く、子どもだけでなく、成人向けも開催してほしいという要望があり、次年度からは数回の開催を予定している。

一方で、台風19号により小諸市周辺も被害を受け、その影響でセンターでもやむなく中止にする事業が発生した。野外での活動が多いだけに、安全を最優先とした結果でもあった。

また、新型コロナウイルス感染症の広がり、利用者の安全のために第7回ロングトレイルシンポジウム（共催事業）は中止となった。このシンポジウムには、全国から募集定員を上回るおよそ140名の参加申し込みがあり、オリンピック後のムーブメントやインバウンド利用を考察する絶好の機会であっただけに、残念という声が数多く寄せられた。

今年に入ってから、新型コロナウイルス感染症の予防のため、施設の利用の取りやめ、主催事業の多くを中止もしくは延期するなどの対応が相次いだ。中止や延期となった自主事業の多くは「歩く」をベースにしたもので、キャンセル待ちもある状態であっただけに惜しまれる。新型コロナウイルス感染症の影響はしばらく続くと思われ、次年度の事業への影響や利用団体の減少なども想定されるであろう。

なお、2019年度における安藤百福センターの利用者数は、3,575名（延べ4,856名）となった。

ロングトレイルの動向

東日本大震災の復興を目的とする「みちのく潮風トレイル」が、環境省などによって6月に全線開通した。福島県相馬市松川浦から青森県八戸市蕪島まで、ほぼ海岸線沿いに設定された、およそ1,000kmの国内最長のロングトレイルである。このコースは4県をまたいで、28の市町村を通るという長大なものだ。この「みちのく潮風トレイル」の誕生で、各地にロングトレイルを造ろうとする動きが、いっそう加速するものと思われる。

2019年の夏は、一昨年に続いて猛暑に見舞われた。そのため、夏期のトレイル需要はやや低く、秋のハイシーズンに期待されていた。しかしながら、9月には秋雨前線などによる豪雨災害が発生し、10月には台風19号によって河川が氾濫するなど、各地に大きな被害をもたらした。これらの影響で、特に西日本から中部日本にかけて、各地に設定されているロングトレイルは崩落、崖崩れ、倒木などにより事実上通行不能となった。トレイルは元来が山道や登山道であり、登路の変更や迂回などは比較的容易であることが多いが、トレイルに至るアプローチや、支線の通行止めが各地で発生している。あるロングトレイルでは、アプローチの約80%が通行不能の状態となった。なかでも、全線開通した「みちのく潮風トレイル」も各所で寸断され、一時、被害状況の把握もままならない状況であった。

いずれにしても、地元自治体などは被害を受けた住民支援が最優先の課題であり、観光資源でもあるロングトレイルの復興は後回しになりがちである。秋のシーズンを終えると、春

までは積雪があり、ロングトレイルは事実上通行不能となる所が多く、春の訪れを待つて復旧が始まると思われる。

一方、去年は天候の不順な日も多く、予定されていたトレイルでの様々なイベントやツアーを中止や縮小せざるをえないトレイル運営団体もあった。

安藤百福センターならびに小諸市は、大きな被害はなかったものの千曲川の氾濫があり、国道や県道なども、崩落や落石などによって一時通行止めとなった。当センターが運営している浅間・八ヶ岳パノラマトレイルは、倒木などで通行不能となった道もあり、予定していた事業も一部中止となった。



トレイルの補修作業（提供＝高島トレイルクラブ）

■ロングトレイル・ムーブメントの背景とマーケットの考察

1970年代～

「歩く」が敷衍^{ふえん}してロングトレイルにつながる背景には、アウトドア・マーケットの動向を考察する必要がある。「アウトドア（ズ）（OUTDOORS）」という単語が、国内で広まり始めたのは、1970年代の半ばであったと推察する。1976年に山と溪谷社から『OUTDOOR SPORTS』が発刊された。活字媒体でアウトドア（ズ）が紹介されたのは初めてではないかと思う。アメリカン・アウトドアズは、多くの若者たちに衝撃と憧れを同時にもたらした。

アメリカのアウトドア・スタイルが HEAVY DUTY という言葉で表現され、BACKPACKING がそのアクティビティの一つとして紹介された。既成概念にとらわれないスタイルが俄然、注目を集めた。荒野や森を歩いて旅するスタイルと言えるだろうか。バックパッカーはフレームバックを担いで、ジーンズをはき、ワークブーツで旅をしていた。

その源流はノマド（NOMAD：遊牧民）と言われた。

早速、日本国内でもそのスタイルを模倣する動きが顕著に見られ、フレーム入りのバックパックが登山用品店の店頭に並んだ。米国製を模倣したような国産のフレームバックが登場するなど、アメリカン・アウトドアスタイルがブームとなった。



1976 年発行の『OUTDOOR SPORTS』（山と溪谷社刊）

しかし、アメリカン・アウトドアズの背景には、人々のライフスタイルも裏打ちされていたが、日本国内ではファッションとしてのブームでしかなかったように思う。さらに日本の気候、風土、地勢、都市交通、住環境などの影響で、フレームバック・ブームは終息も早かった。

とはいえ、このころから米国で意匠され、作られた数々のアウトドア用品やウェア、クライミング・ギアなどが次々に輸入されて、国内のハイキング・登山市場を席卷し始めた。もともと国内のハイキング・登山用品はイギリス、フランス、スイスなどのヨーロッパが源流であったが、既成概念にとらわれない、そして環境を意識した米国のアウトドア用品が少しずつ市場での支持を集め始めた。自然の岩壁などへのダメージを少なくする「クリーン・クライミング」という考え方が入ってきたのもこのころである。

しかしながら、国内でのアウトドア・アクティビティは、その実像はともかく「登山」が主流であり、米国の BACKPACKING とは遠い距離があった。

このころに、国内には数多くのアウトドア用品やウェアが輸入された。例えばデイパック、ダウンジャケット、フリースウェアなどである。デイパックは登山やハイキングだけでなく日常的に使える合理的なデザインだった。それが進化を続け、通勤、通学に限らず、買い物

など生活の中でも、年代を問わず幅広く利用されている。

ダウンジャケットは1960年代に登山用として、主にヨーロッパから本格的に輸入された。当時の価格は大卒の初任給が2万円ほどの時代に、3万5,000円はしたのではないかと記憶している。カラコルムに出かけるため、かなり無理をして手に入れた。それが今や数千円で買うこともできる、冬の国民服的な衣類となった感がある。

初めてフリースを手に入れたのは1975年で、これもカラコルム遠征登山用に購入した。価格は1万5,000円ほどだった。ポリエステル素材で、当初はピリング（毛玉）がたくさんできて、着ているうちに外気が侵入していまひとつだった。このフリースも進化を続けて、温かくデザインも優れたものとなって、誰もが数枚は持っているような日常着となった。

山やアウトドアのモノが街に降りてきて、日常的に利用できるものに変身したとも言える。私たちの身の周りを見渡してみれば、そういうものはほかにもたくさんある。

1990年代～

さて、しばらくしてバブル経済が崩壊し、「安・近・短」というキーワードを具現化するかのように、オートキャンプ・ブームが発生した。

リゾートに代わって、建設費が安上がりなオートキャンプ場が全国に続々と整備された。その数は1,800とも2,000とも言われた。と同時に、フロントにグリルガードを装着した4WD車が、キャンプ場を席卷した。4WD車のハンドルの向こうに荒野が見えたのかも知れない。ヘビーデューティなRV車が街中を走り、オートキャンプ場でファミリーがチャコール・ブリックスに火をつけた。

オートキャンプ場では、テントとタープを張ってバーベキューを楽しむ、ファミリーのレジャー・スタイルが数多く見られた。米国から市場の調査に訪れた、ある大手アウトドア・メーカーの社長がこの状況を見て「日本のアウトドアズはバーベキュー・パーティか。私たちは毎週末に庭でやっている」と笑った。

このオートキャンプ・ブームも中心層のファミリーの子どもたちが中学、高校へと進むにつれ、参加の機会が著しく減少し、5～6年ほどでブームも終焉した。オートキャンプ場の建設は、投資額は少なく、またキャンプ用品も廉価な輸入品が多く、2000年を迎えたあたりでこの市場は沈静化した。ビジネス的には大きな利益が出るようなものではない、との認識が広まった。余談だが、「オートキャンプ」は和製英語である。米国で、あるアウトドアズの業界人から「さすが日本はハイテクの国だ。オートマチックにテントが立つ！」と皮肉られた。

一方、当時はいわゆる中高年の登山が主流であった。健康と仲間づくり、さらに作家・深田久弥が著わした『日本百名山』が見直され、ブームは最高潮に達した。NHKで「日本百名山」が放映されると、このブームに拍車が掛かって、山では「あなたは、いくつ百名山を登りましたか？」などという会話が話題になった。百名山に選定された山々には大勢の登山者が訪れて、山小屋なども活況を見せた。登山靴やハイキング・シューズ、リュックサック

などの登山用品は飛ぶように売れた。

ちなみに、『深田久弥の日本百名山』のビデオは山と溪谷社が製作し、100 万本を超えるベストセラーとなった。その担当者が当時、同社の山岳図書編集部の部長で、現在、日本ロングトレイル協会会長の節田重節氏だった。

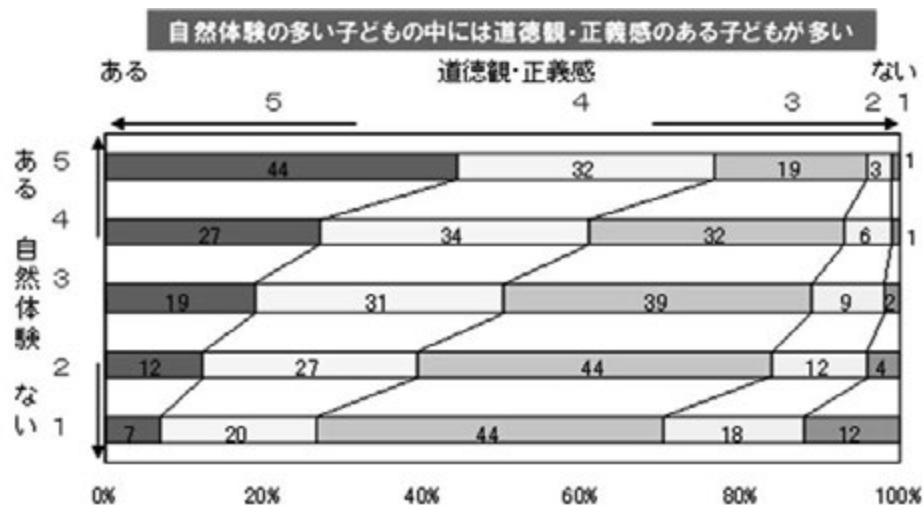
2000 年代～

中高年者の百名山登山ブームの一方で、若者たちは山に向かわず、特に子どもたちの自然離れ、山離れが大きな社会問題になった。

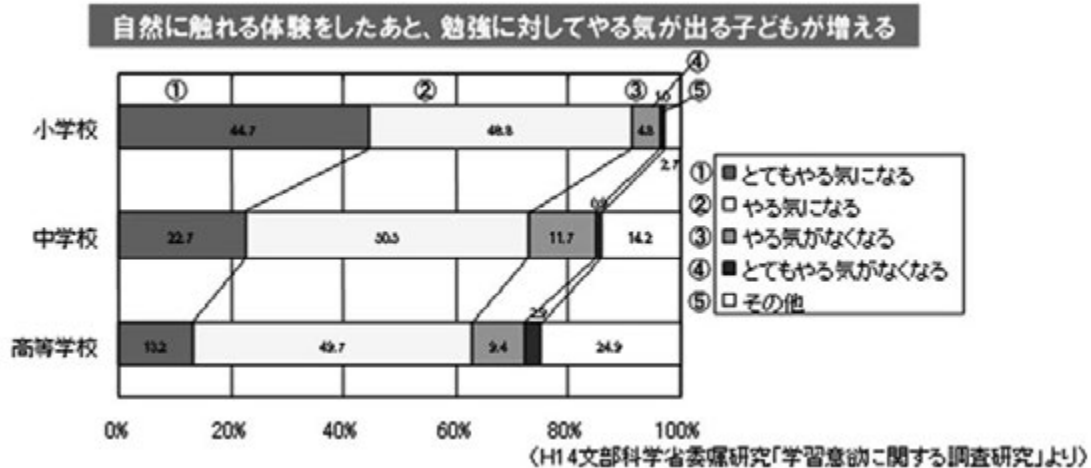
そこで、「(略) 子どもたちに〔生きる力〕を育むためには、自然や社会の現実に触れる実際の体験が必要である (略)」(平成 8 年 7 月 19 日、文部科学省中央教育審議会) という趣旨から、自然体験活動の推進が奨励された。それに呼応するかのように、全国で自然体験学習を指導・推進するための事業が積極的に行われ始めた。青少年育成団体や野外教育を行う NPO 法人などの団体が、国の財政支援もあって積極的に様々な事業を展開した。

そして、自然体験活動は一躍大きなムーブメントになり、スポーツ・アウトドア産業界も関心を寄せた。自然体験活動に市場性があるかどうかを模索するとともに、可能性のあるビジネス・モデルを検討するために、30 社近いアウトドア関連企業が研究会を立ち上げた。

「体験活動の教育的意義」(文部科学省 HP より)



※グラフ中の数値は5段階の割合を示す。
(H17独立行政法人国立青少年教育振興機構「青少年の自然体験活動等に関する実態調査」より)



しかしながら、結論として自然体験活動の推進・振興は、この国に必要なではあるが、市場性は乏しく、アウトドア業界としては、ビジネス的には可能性が低いということになった。この分野への新規のエントリーはほとんどなかった。

また、自然体験活動業界そのものが、明確なビジネス・モデルの構築に苦慮しているのが実情であり、新たな雇用も目立っては発生しなかった。



ハイキングする学校団体（イタリア・ドロミテで）

自然体験活動は、この国に必要な十分な社会的事業であることは間違いない。子どもたちの未来を考えると、自然の中で生きる力を育むことは、極めて重要である。米国の青少年向けの教育キャンプや、フランスのアニマトールの例を述べるまでもない。

しかし、自然体験活動を推進していくには、国もしくは公益団体の社会事業としてとらえる必要があるだろう。あくまでも教育的視点が重要であり、ビジネスの介在は難しい。それ

が今日的な一つの帰結であると考える。

2010 年～

さて、日本百名山ブームの主な担い手であった中高年の高齢化が進み、中高年の登山ブームが一段落すると、「癒し」「自然」「環境」などの意識が高いと言われた若い女性の登山ブームが、2009 年ごろに自然発生した。だれかが仕掛けたわけではない。

それは「山ガール」と言われ、既成の概念にとらわれない「山登りスタイル」であった。彼女たちが着こなす山スカートなどの登山ファッションは、それまでの中高年登山者のスタイルとは一線を画した感があった。数多くのメディアが「山ガール」とともに、そのファッションも取り上げて注目を集めた。また、続々と女性読者のための山岳専門誌も発行された。「山ガール」は自立した女性たちのアクティビティの一つとされた。



これまでの中高年登山とは異なる山スタイル

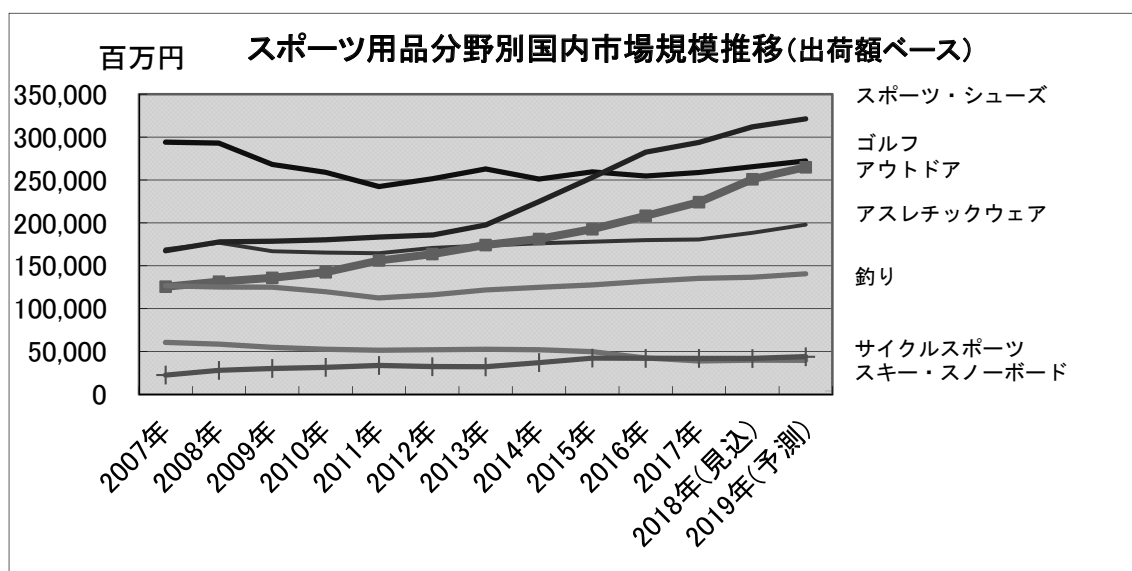
近郊のハイキング・コースでは、多くの山ガールたちを見かけたし、北アルプスの稜線でも大きなバックを担いだ、単独行の若い女性たちにも出会った。この山ガール・ブームは数年ではほぼ終息したが、彼女たちはブームが去っても引き続き山を歩き、登り続けて、一定の参加人口を形成していると思われる。

この山ガールに影響や触発され、彼女たちの後を追うように「山ボーイ」なるものも登場した。そして今、若い男性の山登りムーブメントが、静かに発生しつつあるようだ。トレラン人口の増加も影響していると思われる。つまり、ようやく若者たちの自然回帰、あるいは山回帰というような現象が出てきたようだ。自然発生的か、ある種のサイクルかも知れない。それはアウトドアズの市場にも顕著に表れている。

アウトドア・マーケットの今 2019～

かつて、アウトドア・マーケットはスポーツ市場の中では、さほど大きくはなく、注目されているとは言えなかった。下のグラフはスポーツ分野で、市場規模（出荷市場）で大きいものを示している。この中で、2007 年におけるアウトドアズは、1,256 億円で 5 位であった。ちなみに 1 位はゴルフで、およそ 2,940 億円、2 位がアスレチック・ウェア（体操服など）1,691 億円、3 位がスポーツ・シューズ（運動靴など）1,675 億円、4 位が釣り 1,268 億円となっている。

ところがアウトドアズは昨年、2,649 億円（推計）で 3 位となった。ちなみにゴルフは 1 位だが 2,722 億円で、アウトドアズとは僅差である。スポーツ分野別の上位の市場の推移では、グラフに示されたとおりアウトドアズは着実に右肩上がり、市場規模の拡大が見られる。アウトドアズは出荷額ベースでゴルフとほぼ同様となり、数年のうちにゴルフを上回るものと考えられる。なお、スポーツ・シューズは子どもたちから高齢者まで、幅広く日常的にも利用されているものと考えられ、常に需要が高く、市場規模も大きい。



(データ 矢野経済研究所より作成)

また、アウトドアズの市場規模（小売り市場）は、2019 年でおおよそ 5,230 億円（※）と推計されている。アウトドアズのカテゴリーとして登山は 13.7%で、ここ数年、ほぼ横ばいだが、減少傾向が見られる。その一方で伸長しているのが、ライト・アウトドアズとされる分野で 54.7%。これはハイキング、ファミリー・キャンピング、ピクニックなどであろうか。昨今の少し豪華なキャンピングなども含まれる。また、若い人たちに人気の野外フェスにも、テントを張って参加する人たちが多く、彼らにもアウトドア・ファッション・スタイルが見られる。

そして最近、伸びが著しいのがライフスタイルと言われる分野で、およそ 23%。この分

野の定義について、アウトドア業界にヒアリングを行っても判然としないが、分かりやすく言えば、ファッションだろうと推測する。

なお、スキー・スノーボード、サッカー、野球、水泳などの市場規模（道具、用具、ウェアなど）は、これら上位の種目より低いことを付記しておく（※データはいずれも矢野経済研究所）。

アウトドア・ファッションが上位に

さて、街中で日常的にアウトドア・ウェアを着用する人たちが多くなった。なかでも高価な欧米のアウトドア・ブランドを、ファッション・アイテムの一つとして取り入れている。セレクト・ショップでも、アウトドア・ブランドのウェアがラインナップされ、よく売れている。アウトドア・ブランドが高価といっても、ファッション・ブランドと比較すると、リーズナブルと言われている。

また、戸外でレポートする TV 記者やコメンテーターのウェアも、アウトドア・ブランドが多くなった。災害などの現場取材をするレポーターのレインウェアは、ほぼアウトドア・ブランドだ。ほんの一昔前までは、ビニール製の合羽だった。

また、上記の小売市場には、人気が出てきたワーキング・ウェアやファスト・ファッションのアウトドア・ユース化はカウントされていない。例えば山岳ガイドの中には、アウターはアウトドア・ブランドであっても、インナーやミッドラーは、機能素材のファスト・ファッション・ブランドを着用していることもあるようだ。

かつてアウトドア・ウェアは、登山やハイキングなどのアクティビティ時に着用するもの、という考え方が多かった。しかし、ノーネクタイから始まり、ビジネスの定番であったスーツなどから自由なウェアを奨める企業も増えてきた。アウトドア・ユースのウェアが、機能性やファッション性の高さから支持が増えたと考えられる。ビジネスマンのカジュアル・ファッション化には、クールビズ、ウォームビズの推進も一役買ったように思う。そこにアウトドア・ファッションが取り入れられた。

アウトドア・ウェアは、スポーツ・アパレルというカテゴリーに含まれる。このスポーツ・アパレルという分野の中で、アウトドア・アパレルはトレーニング・ウェアに続いて第2位の出荷市場規模で、2020年は約1,306億円と予測され、3位のゴルフより400億円近くも多く、スポーツ・アパレル全体の中で22%を占めている。なお、1位のトレーニング・ウェアは本来の用途のほか、日常的な衣類として利用されていることも多いのでは、と推察する。

こうした一連の流れが、アウトドアズ分野において「アウトドア・ライフスタイル」というカテゴリーの登場となったのではないかと考える。

このような動きから、アウトドアズの国民的な広がりが明確になってきた。正確にはまだ多くの人たちが、アウトドアの入り口に立っている状況だ。「アウトドアズ」という言葉が、この国で紹介されるようになってから、ほぼ半世紀を迎えてである。

■アウトドアズは「歩く」

そのアウトドアズもキャンプ、バーベキューだけでなく、自然を明確に意識するものに変化してきたようだ。それはスタイルやアクティビティに表れている。

今「歩く」人口は各種の調査のとおり、ほぼ 3,000 万人というのが妥当なところだろう。この「歩く」人口には、散歩、健康のためのウォーキング、散策、ハイキングなども含まれる。これは世界各国でも程度の差こそあれ、同じような状況と思われる。

ウォーキングが盛んな英国のフットパスやフランス、スイスなどのトレイルでは、ダブル・ストックを使って「歩く」人たちを、普通に目にする。スペインの巡礼路も、大勢の人たちがバックを背負って歩いているし、海外から日本を訪れる外国人観光客が、古道を歩くスタイルにもトレンドとして表れている。

ちなみに、安藤百福センターが主催するトレイル関連の歩く事業は、すべてキャンセル待ちの状況である。そして特筆すべきは、参加者の年齢が中高年者に限らず、男女ともに 30～40 歳台が多くなっていることだ。これは、アウトドアズの参加人口の年齢傾向と軌を同じにするのでは、と推察される。

また、スイスを拠点に **World Trails Network** が設立され、世界各国からおよそ 40 のトレイル団体が加入し、情報の交換を行っている。なお、日本ロングトレイル協会は昨年、このネットワークに加入した。



イタリア・ドロミテにて



スイス・ツェルマットにて



日本ロングトレイル協会加盟トレイル

この「歩く」は、世界のトレンドや国内の動向から、歩く観光、歩く旅へとニーズが徐々に移行すると考える。お遍路を歩く大勢の人たち、ツアーでの中山道人気、熊野古道を歩く若い人たちやインバウンドで訪れた外国人旅行者、北アルプスをバックを担いで歩くハイカーなど、日本の自然を楽しむ人たちが増えてきた。

「見て、食べて、寝る」だけの観光ではなく、自然の中を歩き、自然を楽しみながら、健康づくりと家族や仲間との絆を深めたいというマインドが、確実に出てきているように思う。これらの動きを加速し、良質な情報の提供と、トレイル歩きを指導する人材の育成などが、安藤百福センターの役割の一つであると考えます。

文末になったが、新型コロナウイルス感染症の広がり、あらゆる活動・行動が停滞しがちで閉塞感がある。こんなときだからこそ、自然への回帰がより求められるのではないかと考える。そのステージとして、よりいっそう自然を歩き、日常を離れて自然を旅し、自然の恩

恵と素晴らしさを希求する世相が強まってくるのではないだろうか。そんななかで、トレイル、ロングトレイル、そして日本を縦断する JAPAN TRAIL への期待が高くなるものと考ええる。

国内には「歩く」「歩く旅」をマクロでとらえた拠点は、なきに等しい状態である。安藤百福センターが「歩く」文化の醸成と発信、そして「歩く旅」の奨励。さらに敷衍して、ロングトレイルの普及・振興、そして、国内外に向けての JAPAN TRAIL の提唱ができれば、と願うところである。

……However, walking I believe is one of the best safe 'social distancing' activities one can do, keeping people healthy and also social without the need for physical contact. So yes, I agree with you, that walking may attract more attention. ……

Galeo Saintz

World Trails Network International Chair

中村 達（なかむら とおる）

公益財団法人 安藤スポーツ・食文化振興財団理事、特定非営利活動法人日本ロングトレイル協会代表理事、一般財団法人全国山の日協議会常務理事、国際自然環境アウトドア専門学校顧問ほか。

生活に密着したネイチャーライフを提案している。著書に『アウトドアマーケティングの歩き方』『アウトドアビジネスへの提言』『アウトドアがライフスタイルになる日』など。『歩く』3部作（東映ビデオ）総監修。スワット・ヒマラヤのマナリアン初踏査、カラコルム・ラトックⅡ峰、Ⅰ峰登攀隊ほか、ネパール、ニュージーランド、ヨーロッパ・アルプスなど海外登山・ハイキング多数。日本山岳会会員。

日本人の「遊び」が「文化」になる日

節田 重節(日本ロングトレイル協会 会長)

「人間の文化は遊びにおいて、遊びとして、成立し、発展した」(ヨハン・ホイジンガ 里美元一郎・訳)

自分自身の山登りスタイルの確立を

いささか古い話で恐縮だが、1974(昭和49)年、私が月刊誌『山と溪谷』の編集長を拝命したころのことである。30歳になったばかりの新米編集長は、平均年齢26.5歳のスタッフとともに同誌の改革を試みようと、硬軟取り混ぜいろいろな新企画を考えていた。とりわけ欲しかったのが強力な連載記事で、まずは大上段から「なぜ山に登るのか」という、登山者にとって永年の命題に正面から挑んでもらおうと考えた。しかし、問題は書き手である。精神論や技術論を中心として教条主義的な、それまでの日本の登山界に風穴を開けてもらいたいという企画意図だったので、執筆者選びは大いに悩んだ。

東京や名古屋、京都などに、現役の登山家として活動し、原稿の書ける論客は何人かいたが、以前に原稿を拝見して、その考え方や文体が非常に印象に残っていた京都の高田直樹さんに決め、新幹線に乗り込んだのだった。高田さんが府立高校の化学の先生であることも選んだ理由の一つだった。当時の『山と溪谷』の読者の平均年齢は、なんと23歳くらい。近年の中高年を中心とした登山者像と比較すると、まさに隔世の感がある。したがって、コアな読者は18歳から25歳くらいの若者たちで、高校生の読者も多かったのである。余談になるが、安藤百福センターの中村達センター長は、この高田先生の教え子である。

さらに、タイトルは京都弁で、と高田さんにお願いした。こうして始まったのが『なんで山登るねん——わが自伝的登山論』である。自身の人生経験、登山体験をベースに、柔らかな京都弁を駆使しながらも、鋭い洞察力をもって展開される連載は大好評で迎えられ、予想したとおり高校生を中心に若者たちから圧倒的な支持を得た。そして、3年間、35話の連載は1978(昭和53)年、単行本として刊行され、山の本としては珍しいほどのベストセラーとなった。さらに「続編」が79年に、「続々編」が83年に発刊されている。



『なんで山登るねん』3部作

故日暮修一さんのイラストが印象的なジャケット

さて、前置きが長くなってしまったが、この本は登山論としてだけでなく、人生論、教育論としても読まれたと思う。高田さんは、登山はもとよりスキー、バイク、オーディオ、パソコンなど、当時としては珍しいマルチ人間だったからであろう。読者はそれぞれ自分自身の人生経験と重ね合わせ、様々な感慨を抱きながら読んだのではなかろうか。そして、高田さんは最終話「〈標準語〉的登山観を捨て、自分の〈なんで山登るねん〉を」の文末で、「登山人口一千万というこの日本に、一千万の〈なんで山登るねん〉が生まれることを、ぼくは望んでいるのです。」と結んでいる。自由な発想の下、それぞれが自分自身の山登りスタイルを確立して楽しもう、と呼び掛けているのであった。

ホイジンガやカイヨワに見る「遊び」と「文化」

高田さんの連載は自伝的なエピソードをベースに展開、語り口はソフトながらも一話一話、鋭い論評が加えられていた。多くの読者が共鳴したり、なかには反感を覚えたこともあったかと思われるが、自分自身の山登りのあり方について、改めて考えさせられたのではなかろうか。私自身も雑誌連載時、ファースト・リーダー（最初の読者）として、毎月、いち早く生原稿を読ませてもらい、いろいろと勉強させてもらったと言える。なかでも印象に残っているのは、「遊び」についての考察で、ホイジンガやカイヨワの存在を知ったのも、この連載からである。

ヨハン・ホイジンガはオランダの歴史家で、今は古典中の古典となっている、その著書『ホモ・ルーデンス』（1938年、中公文庫）で、

「遊びとは、あるはっきり定められた時間、空間の範囲内で行われる自発的な行為もしくは活動である。それは自発的に受け入れた規則に従っている。その規則はいったん受け入れられた以上は絶対的拘束力をもっている。遊びの目的は行為そのものの中にある。それは緊張と歓びの感情を伴い、またこれは『日常生活』とは『別のもの』をという意識に裏づけられている。」

と述べている。

ホイジンガは、人間とは「ホモ・ルーデンス＝遊ぶ人」のことであると言う。「遊び」は「文化」に先立つものであり、人類が育んできたあらゆる「文化」は、すべて「遊び」の中から生まれ発展してきた、と述べている。

さらにホイジンガの跡を継いで「遊び」の理論化を目指したロジェ・カイヨワ（フランスの文芸批評家、社会学者、哲学者）も、『遊びと人間』（1958年、講談社学術文庫）でホイジンガとほぼ同様に、「遊び」について6つの特徴を挙げている。

- (1) 自由な活動：強制されたものでなく、魅力的で愉快的な楽しみであること
- (2) 隔離された活動：明確な空間と時間の範囲内に制限されていること
- (3) 未確定の活動：ある種の自由が必ず遊戯者側に残されていること
- (4) 非生産的活動：財産も富も、いかなる種類の新要素も作り出さないこと
- (5) 規則のある活動：通常法規を停止し、約束ごとに従う活動であること

(6) 虚構の活動：二次的な現実、または明白に非現実であるという特殊な意識を伴っていること

こうして見ると、ふたりの「遊び理論」を体現しているのが、まさに「山登り」ではないだろうか。「遊び」の究極の形が「山登り」にはあり、それだけに真剣に遊ばないと最悪の場合、死につながることもある「遊び」だ。

仕事上でミスなどすると、「遊びじゃないんだぞ！」と叱られることがあるだろうが、タレントのタモリがゴルフのプレー中、パートナーに向かって「真剣にやれよ、仕事じゃねえんだぞ！」と叫んだことがあるという。けだし名言である。

「遊び心」に欠けた日本百名山ブーム

「節田さん、最近、おじさんやおばさんたちがやたら山の上に上がって来るんですよ。来てくれるのはありがたいんですけど、ちょっと困ってるんです。特におじさんは下界の肩書きなんかを振りかざして、威張るんですよ。なんとかありませんかね？」と、北アルプスの山小屋の主人から電話が来た。1975年過ぎのことである。確かにこのころから日本の高齢者人口が増え始め、中年からのライフスタイルや生きがい論議が盛んになった時代である。その流れが、とうとう山の上に登ってきたということだった。

山登りは、健康体であれば「歩く」というプリミティブな行動をベースに、最低限の知識と装備があれば誰にでもエントリーしやすい遊びで、定年退職後の趣味として「山」を選ばれたのは、大いに結構なことである。ただし、山登りは奥が深い。単にがつつ歩くだけでなく、中高年らしく自分の人生と照らし合わせながら、幅広く楽しんでもらいたいと考え、1980（昭和55）年、『中年からの山歩き入門』（栗林一路著、山と溪谷社）を刊行した。「中年からの」というタイトルに営業部は猛反対したが、「若者向けの山の手引書はたくさんあるが、中高年向けの本はない。これから山は、中高年が中心になるんだ」と説得し、半ば強引に出版した。1万部があつという間に売り切れ、何度も版を重ねた。いわゆる「中高年登山ブーム」の嚆矢である。



単なるピークハントだけでなく、広く、深く山を楽しみたいもの（剱岳・剱沢にて）

ただ困ったことに、中高年の「にわか登山者」は経験が浅いだけに、自分で山を選べないのである。そこで提案したのが、作家・深田久弥が筆を執った山の名著『日本百名山』（1964〈昭和 39〉年、新潮社）である。「自分で山を選ぶのが難しかったら、こんなリストもありますよ。ただし、ハイキング・レベルからアルプスの高山まで、難易度は千差万別ですから、自分の力量に合わせて山を選んでくださいね」というのが、我々が日本百名山を提案した趣旨だった。ガイドブックの出版とともに、NHK テレビと組んで『深田久弥の日本百名山』を放送した。わずか 10 分の番組で、しかも最初は BS 放送だったが、思わぬ人気に再放送を繰り返し、最後は総合テレビでも放送された。そして、1995（平成 7）年、テレビ放送をビデオ化した『深田久弥の日本百名山』全 20 巻を刊行、100 万本を超える大ヒットとなった。さらに翌年には、劇作家『田中澄江の花の百名山』も刊行、同じく 100 万本超えの人気商品となった。このころが、中高年登山ブームが最高潮の時期だったと思う。

ところが、日本百名山という“カンフル剤”が効き過ぎ、加熱してしまったようだ。山登りそのものを楽しむというより、日本百名山を登ることそのものが目的化していったのである。札所巡りのようなことが好きで、何ごとにも律儀で、遊ぶことが下手な日本人の性格だろうか、目標達成に邁進し、成果主義に走っていったのである。没個性の山登りが幅を利かせていったともいえる。

ある日、山と溪谷社に電話があった。「あのお、私は日本百名山を全部登ってしまったのですが、この後、どうしたらいいのでしょうか？」と言う。「100 座もの山に登っていながら、何を学んできたのですか。自分の山登りが見えていないんじゃないですか」と言いたいところをぐっと我慢して、「それなら、日本二百名山や三百名山もありますし、都道府県最高峰などもありますよ」と皮肉交じりに答えたが、それは多分、相手に伝わっていなかったと思う。

山登りには多彩な楽しみ方が

山登りにはいろいろな楽しみ方がある。ピーク・ハンティングだけがすべてではなく、地形や地質、動植物、気象、星座などのほか、山を取り巻く歴史や民俗、宗教、文学、絵画、写真等々、実に多彩である。しかるに、悲しいかな「中高年登山＝日本百名山」という固定観念ができ上がってしまったのである。“仕掛け人”として大いに反省したことであった。

そもそも、私や中村センター長が会員となっている、日本最古の山岳会である日本山岳会は、「日本博物学同志会」の支会として、1905（明治 38）年に設立されたものである。同会は 1901（明治 34）年、東京府立第一中学校（現・都立日比谷高校）において、生物好きの生徒と卒業生が設立した組織で、当初は植物や昆虫の採集・研究が目的だった。やがて、その活動範囲が里山から山岳地帯に拡大し、登山そのものへの関心が高まっていったのである。さらに同会のメンバーと「日本アルプスの父」と呼ばれるウォルター・ウェストンとの出会いがあり、英国山岳会（1857 年創立）に倣い、日本初の「山岳会」が誕生したのであった。

地理学者の小泉武栄先生（東京学芸大学名誉教授）が、『山と溪谷』2020年4月号において、「山の自然学へのいざない」と題して、次のように書かれている。

「……北アルプスの蓮華温泉から入り、朝日岳、雪倉岳、鉢ヶ岳、白馬三山を縦走した。ここでは美しいお花畑だけでなく、実に多彩な高山の景観が展開し、私を驚かせた。ハイマツやコマクサをはじめとするさまざまな植物群落、残雪、氷河地形、雪食地形、構造土、岩塊斜面と岩屑斜面、二重山稜、岩壁と岩錐、川と湖。ほとんど宝の山にでも入りこんだ気分である。気分が高揚し、私は修士論文のテーマを『高山帯の景色はなぜこんなに多彩で美しいのか』にした。」

このように山には多彩な表情があり、「風景を見る目」を養うことも、山登りやウォーキングに深みをもたらすものと考ええる。

近頃、街歩きの達人・タモリが出演する『ブラタモリ』（NHK 総合テレビ）が人気を呼んでいる。「ブラブラ歩きながら、知られざる街の歴史や文化、人々の暮らしなどに迫り、新たな魅力を再発見する」というのが番組のテーマだが、そのベースとなるのは地形や地質である。その方面に強いタモリの蘊蓄とゲストの解説が番組の魅力となっており、以前は地味で陽の当たることが少なかった地学や地理の世界に、人々の注目が集まるようになった。すなわち、山歩きでも街歩きでも、なにがしかの知識と関心を持って歩けば、見慣れた平凡な風景の中からでも、必ず新しい発見があるものだ。

自分が仕掛けておきながら、マッチ・ポンプ的に「中高年登山と日本百名山ブーム」を批判してきたが、近年、山を歩いていると少しずつ変化を感じる。「中高年登山ブーム」も第1次から第2次に移り、そこに「山ガール・ブーム」が加わってきた。「山ガール」はトレンドとして一時的なもので、いずれ消滅するのではないかと言われてきたが、意外にも持続している。彼女たちは分をわきまえていて無理をせず、自由な発想で山という自然を、文字どおり自然体で楽しんでいるように見える。なかには単独で、しかもテント泊でアルプスを縦走している兵の山ガールもいて、実に頼もしい限りだ。さらに、この山ガールたちに引っ張られるようにして、遅まきながら「山ボーイ」たちも増えているように見える。いずれにしても、これらの若者たちには、旧来の「日本の山登り」（そういうものがあるかどうか、定かではないが……）に囚われることなく、自由な発想の下に「山」を楽しんでもらいたいと願っている。

変化が見られ始めた日本人の旅

私の家内と娘が2, 3度ツアーに参加しただけなのに、毎月膨大な量の旅のカタログが某ツーリズム社から届けられる。まさに「旅の通信販売」である。「日本百名山ブーム」に見られるように、律儀な日本人には、札所巡りのような「お仕着せの旅」がフィットするというDNAが頑固に受け継がれているように思う。没個性は旅の形にも表れている。

本センターの『2017年度 事業報告書』にも書いたが、大手旅行会社のカタログを見ると、名所旧跡という「点」をチャーター・バスなどで効率的に巡れることをアピールす

るパッケージ・ツアーがほとんどで、点と点を結んだ「線」を歩いて楽しむ、「歩く旅」という発想は希薄だ。富士山麓一周ウォークや東海自然歩道完歩ツアー、街道ウォーク、そして、「信越トレイル」や「みちのく潮風トレイル」のほんの一部分が旅行商品化されている程度である。ましてや、点と線にプラスして「面」をも楽しもうという旅は、日程的なものがあると思うが、皆無に近いと言ってもいいだろう。

ただ近年、日本人の旅の形も徐々に変化してきているように思う。某社の旅のカタログを見ていると、「暮らすように旅する」とか「長期滞在ハイキング」あるいは「ガストロノミー・ウォーキング」などといったキャッチフレーズが現れてくるようになった。海外でのツアーも近年、スケジュールの中にショート・ハイキングなどの体験プランを盛り込むことが多くなってきている。相変わらず有名観光地を巡る定番型の旅が圧倒的に多いが、明らかに「滞在型」「体験型」のツアープランが増えてきていると言える。



長期滞在して歩いてこそ、その土地の魅力が味わえるもの
(スイス・ベルナーオーバーラントのバッハゼーにて)



カヌーで花見をする風流なアウトドアズマンも現れた(琵琶湖・海津大崎にて)

ちなみに「ガストロノミー・ウォーキング」とは、フランス・アルザス地方発祥とも言われるウォーキング・イベントで、その土地を歩きながら食や文化、歴史などを楽しむツーリズムのこと。日本ではこれに温泉をプラスして、「めぐる」「たべる」「つかる」をキーワードとする、新しい旅のスタイルとして全国に広がりつつあるという。

ところで、時代も旅のスケールも極端に異なるが、「点と線と面」の旅の代表は、140日間もかけてなされた松尾芭蕉の『奥の細道』ではないかと私は考えている。もちろん、歩くしか移動手段がなかった時代のことであり、旅にプラスして吟行という目的があるので、現代と照らし合わせて一概に語ることはできないが、そこには旅の本質的なものが存在しているように思う。特に「面」という観点から見てみると、栃木県・黒羽（14日間、最長）、福島県・須賀川（7日間）、山形県・尾花沢（10日間）、石川県・金沢（8日間）、石川県・山中温泉（9日間）など、要所要所で長く滞在している。もちろん、休養を兼ねて俳諧の弟子たちと交流し、歌仙を巻く（連歌・俳諧の一形式で、三十六歌仙にちなみ36句から成る）ことが主目的ではあったが、滞在することによってその土地をよく知り、風物に接することによって、句作へのイメージも湧いてきたのではなかろうか。

この『奥の細道』の全行程を、2週間かけて車で回ったことがある。各地の芭蕉句碑を訪ねての旅であったが、奥羽山脈を越える山刀伐峠越えや立石寺（山寺）の参道、羽黒山参道と南谷、金沢市内の句碑巡りなど、一部は車を捨てて歩いてみた。三百余年前にタイムスリップすることは難しかったが、数々の名句が生まれた土地の雰囲気や背景が、色濃く感じられる旅だった。

「歩くツーリズム」こそ観光立国の柱

新型コロナウイルス騒ぎで、政府が期待していたインバウンド4,000万人と消費額8兆円の目標達成は難しくなったが、今後もその数が増えていくことは間違いなかろう。ただし、爆買いに象徴されるような「モノ消費」から「コト消費」にシフトしているのが近年の傾向である。観光庁などのデータによると、訪日観光客の目的の第3位が「自然や景勝地の観光」となっており、48.5%の人々がそれを楽しんでいる。特に欧米豪の観光客が地方エリアで自然を楽しんでおり、その消費額が都市圏を大きく上回っている。1人当たりの平均消費額を国別で見ても、①オーストラリア（24万9,000円）、②英国（24万2,000円）、③フランス（23万8,000円）となっている。これらの国からの観光客は、宿泊日数が12～17泊と大きく、彼らの旅が「滞在型」「体験型」であることが見て取れる。

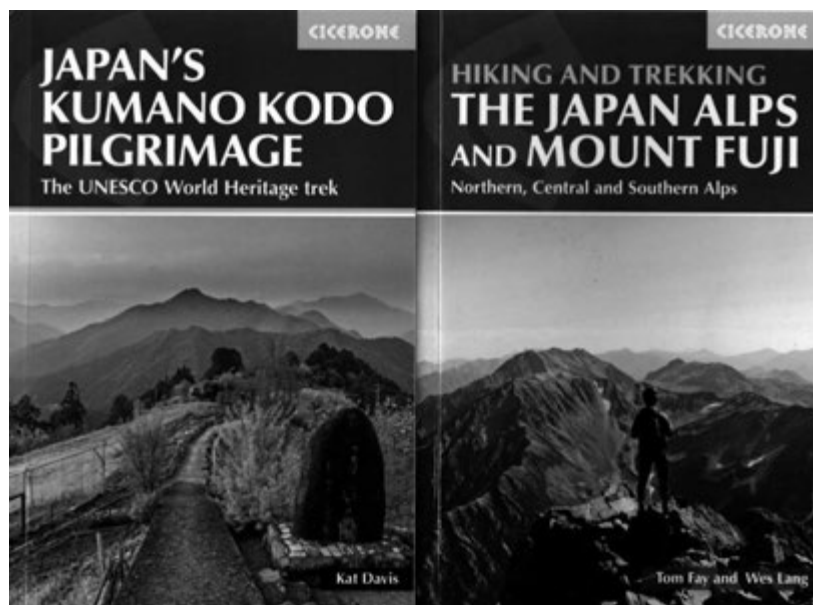
「観光大国」と呼ばれる国は「自然・気候・文化・食」という4条件を満たしていると言われる。日本はまさに最強の「観光資源国」ではないか。日本の観光政策は「文化・歴史」に偏重し過ぎてきた。小さな島国ながら多様性に富んだ豊かな「自然」を強くアピールしていけば、日本の観光はまだ成長する可能性があると思う。そのためには、国立・国定公園はじめ国有林野などの自然を積極的かつ計画的に活用し、新しい観光資源を発掘することが課題である。遊んだことのない霞ヶ関の官僚たちも、「統合型リゾート（IR）」は観光立国

の柱」などという政府の愚策に振り回されていないで、身銭を切って自らも体験しながら、インバウンド・ツーリストたちの目線に立って、将来性のある施策を考えてもらいたいものである。

昨年、イギリスの出版社から日本の山と古道のガイドブックが出版された。『日本アルプスと富士山』『熊野古道』の 2 冊で、版元は湖水地方のケンダルという町にある CICERONE（英語読みでシセロン）という会社。この出版社は 1969 年、湖水地方のガイドブックを出版したことを皮切りに、英国だけでなく、ヨーロッパや世界中のガイドブックを 350 点以上出版しており、英国のアウトドア好きから絶大な信頼を得ている会社だという。この本を使って、英国をはじめ欧米の人々が日本でどんな山旅をするのか、今から楽しみである。

思うに 1896 年、かの W・ウェストンがロンドンで “Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps”（邦訳『日本アルプス—登山と探検』1933〈昭和 8〉年、梓書房）を出版、さらに 1918 年、『The Playground of the Far East』（邦訳『極東の遊歩場』1970〈昭和 45〉年、山と溪谷社）を上梓しているが、100 年以上経って、とうとう本格的な日本の山と古道の最新ガイドブックが英国で出版されたことになる。

2 冊とも日本をよく知り、歩いているアウトドア・ライターが執筆しているが、日本のガイドブックをベースにコース設定されており、写真も豊富で、全体にしっかり構成されている。とりわけ特徴的なのは、タイトルや地図の地名に漢字が併記されている（英文のガイドブックなのに）ことだ。それだけこの本の著者が日本を理解している証である。私も海外のハイキング・ガイドブックを作ったとき、必ず現地名をローマ字とカタカナで併記したが、このような細かい心遣いが読者に感謝されるのである。



昨年、英国シセロン社から刊行された、日本の山と古道のガイドブック 2 冊

なお、遅まきながら国土地理院もインバウンドの増加に対応すべく、多言語表記の地図を

ウェブ上で試験公開している。同院はすでに国内の地名などの英語表記や、外国人が理解しやすい地図記号などを盛り込んだ表記規定を定めており、これらの普及や今後の課題を検証するため公開したものである。

このように、欧米豪系のインバウンド・ツーリストが、明確な目的を持って日本にやってくる時代である。ただ、農耕定着型の日本人と違って、ノマド（遊牧民）にルーツを持つ彼らは、ガイドブックを忠実になぞるような旅はしないだろう。自分たちの好奇心とセンスで自由にアレンジし、自分たちなりの日本の旅を楽しむのではなかろうか。彼らは特に日本独特の自然や文化に触れられる「歩くツーリズム」を求めるようになってきている。それらの旅を通じて何かを感じるには、人間にとって歩くスピードで観察の方が得られるものも多いと思う。「歩行」と「思考」がマッチしたとき、観察眼も磨かれるのではなかろうか。

たとえば中山道だが、この地域は1980年代前後から欧米のツーリストには知られた存在で、『ロンリープラネット日本版』に中山道が上位にランクされたことを契機に、今では世界中からツーリストが訪れるインバウンドの聖地となっている。馬籠～妻籠宿間を歩くツーリストの数は、2015年のデータでは年間約4万人で、その約47%が外国人である。彼らが評価するのは、木曽の山並みや森、川、滝、棚田などと農村の景観や生活で、そこにある「静けさ」や「穏やかさ」を求めて訪れているようだ。いわば、日本人にとっては農村部で見慣れた「普通の景観」だが、そこに魅力を見出しているのである。そのような「歩くツーリズム」のフィールドとなるのが各地のロングトレイルやフットパス、旧街道などであり、やがて「JAPAN TRAIL」がその中心となっていくことを願っている。

このように、インバウンド・ツーリストたちの楽しみ方を目の当たりにすることによって刺激を受け、良い意味で、日本人の旅の形も次第に変わっていくのではないかと期待している。山登りも旅も、非日常へワープして楽しむ「遊び」の世界であり、人間社会は「遊び」をなくしたとき、ようやくその大切さに気付くのではなかろうか。我々も日常（ケ）と非日常（ハレ）の間をスマートに行き来しながら、豊かな人生を送るために「遊び心」を磨いていきたいものである。

「〈文化〉は〈遊び〉の中から始まった」というカイヨワの言葉を、改めて噛み締めてみたい。

節田 重節（せつだ じゅうせつ）

1943年、新潟県佐渡市に生まれる。中学時代に見た映画『マナスルに立つ』や高校時代に手にしたモーリス・エルゾーグ著『處女峰アンナブルナ』を読んで感激、山登りに目覚める。1961年、明治大学法学部に入学と同時に山岳部に入部、山漬けの4年間を送る。1966年、(株)山と溪谷社に入社、40年間、登山やアウトドア、自然関係の雑誌、書籍、ビデオの出版に携わり、『山と溪谷』編集長、山岳図書編集部部長、取締役編集本部部長などを歴任。取材やプライベートで国内の山々はもとより、ネパールやアルプス、アラスカなどのトレッキング、ハイキングを楽しむ。2006年、同社退職後は公益財団法人植村記念財団理事やNPO法人日本ロングトレイル協会会長など、登山・アウトドア関係のアドバイザーを務めている。

中山道てくてく旅

～欧米豪の人々は、なぜテクテクで馬籠峠を越えるのか？～

藤原 義則（公益財団法人妻籠を愛する会 理事長）

宿場として日本一の評価

妻籠宿は長野県の南西部、木曽郡南木曽町にあります。中山道の江戸と京都のほぼ中間、木曽路の入り口です。昭和 30 年代後半、我が国が高度経済成長の時期でありましたが、その波に乗れなかった県境僻地の過疎地、妻籠宿には「限界集落」の足音が近付いていました。

住民を食べさせる手段として集落保存＝観光開発で活路を見いだした地域です。集落保存に成功して、江戸時代の情緒を体感でき、多くの観光客を惹き付けているのが妻籠宿です。板葺き石置き屋根、立繁格子、平入の木造家屋が軒を連ねる宿場です。長野県の明治百年記念事業として昭和 43 年から 45 年にかけて寺下地区の保存工事が行われ、その後、宿場全域の修復工事が行われました。51 年には、国の文化財保護法の改正により「重要伝統的建造物群保存地区（重伝建）」に選定され、宿場と一体である街道、中山道の整備も行われ、快適なテクテクの道になりました。なお、中山道は国の史跡に指定されています。



重要伝統的建造物群保存地区の選定前後の街並み

宿場と街道を含め重伝建地区は 1245.4ha、宿場から見える山の稜線まで保存の対象となっています。私はこの景観保全に取り組んでいる「公益財団法人妻籠を愛する会」に所属しています。この会は全戸網羅の住民組織です。昭和 43 年に発足し、今年で 53 年が経過しました。住民の保存に対する申し合わせ事項である「住民憲章」を定め、家屋の保全を含めた保存地域全体の景観保全に取り組んでいます。

昭和 40 年代の中ごろ、NHK の『新日本紀行』やアンアン、ノンノ族、ディスカバー・ジャパンの旅行ブームに乗り、人気観光地となりました。現在も 40 万人を超える旅行者が訪れています。観光客の皆さんは「爺さん、婆ちゃんも、こんな家に住んでいたよね。落ち

着く場所だよね」などと言ってくれます。「観光地化されていない観光地」との評価も得ています。



妻籠宿（中山道 42 番目の宿場町）

なお、この宿場の評価ですが、日本経済新聞社『Nikkei プラス 1』で、「全国にある江戸情緒を体感できる宿場町」「木造の家並みは、旅情を誘う」「訪ねてみたい風情あふれる宿場町を専門家が選んだ」という評価で妻籠宿は、全国 1 位に選ばれました。

中山道「サムライ・ルート」として人気

両隣の宿場、三留野宿・馬籠宿を結ぶ街道は、江戸と京都を結ぶ中山道で、現代のロングトレイルとしてハイカーに好評なコースです。特に馬籠宿～馬籠峠～妻籠宿間は欧米豪の人々に「サムライ・ルート」と呼ばれて、超人気のコースとなっています。このほか日本では熊野古道が人気です。この中山道サムライ・ルートは約 9km、2 時間から 3 時間のコースです。馬籠宿が標高 600m、馬籠峠が 790m、妻籠宿が 430m で、約 400m の標高差です。土の道、路傍の石仏、小さな祠、男滝・女滝、きれいな溪流、見上げる大径木、四季折々の景観、道標、熊除けと音色を楽しむ鐘、洋式トイレの設置、女性一人でも安心・安全にテクテクを楽しめるコースです。

「大名も侍もお姫様も杣人も百姓も通ったこの道を、今、自分たちが歩ける」「江戸時代にタイムスリップしたようで、日本らしい所だ」と目の青い人や金髪の旅人がテクテクを楽しんでいます。



テクテクを楽しむ観光客

無料休憩所は国際会議場

馬籠峠の手前 600mほどの所に無料休憩所がありますが、当会が運営している江戸時代の建物「一石枳立場茶屋^{いちこくちたてばちや}」で湯茶とお茶請けの漬物の接待を受けて国際ミーティングを行い、これから歩く馬籠宿や妻籠宿への情報を共有しています。囲炉裏の炎をバックに江戸の風情を楽しみながら「私、今こんな所でグリーンティーを楽しんでいるのよ」と、国元の友へ情報発信しています（Wi-Fi スポットでもあります）。つまり、宣伝費無料でこのサムライ・ルートを PR してくれます。もう少し詳しく紹介しますと、ここへは昨年、世界 67 ヶ国の人々が立ち寄りました。昨年のハイカーは 5 万 8,000 人、そのうち外国人は 3 万 9,000 人、67%です。そのほとんどが欧米豪の人々で、日本人は小さくなって歩いています。「ここはヨーロッパかオーストラリアかい？」といった状況です。



一石枳立場茶屋



茶屋で接待を受ける外国人観光客

私たちはここを「国際会議場」と呼んでおり、議題は「国際交流について」と表現しています。本音は、外務省あたりが人件費を少し支援してくれないかなあ、と。この立場茶屋

は彼らの人気スポットで、超有名な茶屋でして、多い日は 800 人もの人々がここのお茶を楽しんでいます。もちろん無料休憩所で、緊急時のお助け小屋でもあります。落書き帳は横文字しか書かれていませんし、日本人は書くことを遠慮しています。

おもてなし・環境整備が実を結ぶ

次に、彼らがなぜこの峠越えに魅力を感じているか、ですが、この 10 年にわたり継続して実行してきた「おもてなし・環境整備」が実を結んできたと感じています。ハード面では安心安全なルート、道標がしっかりしている、1km ごとに洋式トイレが整備されている、荷物のキャリーオーバー・システム、パンフレットの英文化、Wi-Fi スポット、休憩所がある、などです。ソフト面では、お休み所のサービス、掲示板の整備、眺望確保、トイレの清掃、観光案内所のスキルアップ（ワンスポットクリア）などがあります。もちろん改善や自己評価のため、絶えずアンケートで直接、意見収集をしています。

彼らからは、観光地化されていない観光地、伝統的な街並みを楽しむ、歴史的な建造物・街並みを楽しむ、自然の中でウォーキングを楽しめる、などワンダフル・ビューティフル・エクセレントの回答が寄せられています。「県境僻地の過疎地でアクセスが少しばかり悪くても、この景観を得られれば全然、問題ないよ！」ということでしょう。



英語表記された道標



トイレの洋式化



Wi-Fi スポットの整備

ところで、馬籠峠の手前 300mほどの所に、標高 777m地点があります。ここは「熊除けの鐘」と「トリプル 7」のラッキー・ポイントです。「願いごとを唱え、鐘を鳴らしてください」と表示してあり、皆さん、鐘を鳴らしています（熊除けにもなっています）。



777（トリプルセブン）の鐘

妻籠宿～南木曽駅間のテクテク・コース

このコースは比較的緩やかなアップダウンのコースで、約 4km、1 時間弱で歩けます。妻籠宿～南木曽駅間のバスの本数が少ないので、テクテクの人も多いルートで、ここはミツバツツジの見所でもあります。妻籠宿から南木曽駅の方向（北側）へ 15 分も歩き、急な坂を登れば、妻籠城址の登山道に着きます。この登山道を 10 分ほど登れば、妻籠城址本丸です。南側は妻籠宿と馬籠峠、北側は三留野宿・与川方面、西側は木曽川・東濃方面と眺望は素晴らしく、「木曽路はすべて山の中」そのものの風景が眼下に広がります。



妻籠城址から望む妻籠宿

この山城は 1584（天正 12）年、小牧・長久手の合戦の前哨戦として、徳川方と豊臣方の戦いがあった所でもあり、また、関ヶ原の合戦で、徳川秀忠が上田から駆け付け、ここで徳川方の勝利の報を聞いた場所でもあります。登山道は良く整備されていて、比較的容易に登れます。空堀や帯廓がそのまま保存されており、眺望と合わせて一見の価値あります。全山ミツバツツジの群生地となっており、春の花見もお勧めです。

上久保の一里塚、神戸地区の借景

上久保の一里塚は、江戸から数えて 78 番目の一里塚で、国道と鉄道が木曽川に沿って開設されたため貨物輸送や旅人の通行がそちらに移り、改変も少なく当時の姿を保っています。ここを通過して 5 分も先へ進めば、戦沢^{せぎさわ}の幅員の狭い橋を通過します。この沢が妻籠村と三留野村の境界であり、ここから三留野村となります。妻籠宿の重伝建保存地区もここまです。ここからしばらくの間、家並み・庭園・街道・庭園・遠くの山並みとが一体になった、美しい景観の中を進むことができます。いわば借景の中の中山道です。

神戸^{かみど}の集落は妻籠宿と三留野宿の間に位置する間の宿で、当時の面影を醸し出しています。この借景の中を進み、間の宿を抜けると下り坂になり、SL のあるミニ公園を通過すれば、その先で南木曽駅が目に入ります。



当時の姿が残る上久保の一里塚



借景の中を歩く

インバウンドの評価とメディア対応

前述しましたが、私たちは海外から訪問の人たちを対象に、一石柝立場茶屋と観光案内所でアンケートを収集し、対面でのヒアリングを通して、おもてなしの満足度を上げる努力をしています。そして、その評価が「Wonderful・Beautiful・Excellent」でした。

なお、「妻籠を愛する会」の方針として撮影、雑誌の取材などは事前申請許可制となっており、「旅物語」のようなルポ記事などは歓迎しています。また、旅行雑誌などの記事の校正や写真の提供などを行っています。しかし、映画・ドラマのロケやドローンを使用しているのは、映画やドラマのセットとして保存しているわけではないので、お断りしています。宿場の景観を見ていただくための場所であるためです。

海外のメディアでは、BBC の日本特集で「Joanna Lumley」がこのサムライ・ルートを紹介しています。また、Smithsonian が“A Walk Through Old Japan”で紹介しています。さらには、Time Out London では“On the samuraitrail”、NEW YORK TIMES の“1,000 PLACES TO SEE BEFORE YOU DIE”で紹介していることによって、世界の英語圏（欧米豪）の人たちに知れ渡ることになりました。

今後も環境整備・保全に全力で取り組み、「がっかり」という表現で評価されることのないように努めてまいります。どうぞ皆さんも、健康増進とテクテク歩きを楽しみにおいでください。

藤原 義則（ふじわら よしのり）

公益財団法人妻籠を愛する会理事長。72 歳。会は「妻籠宿重要伝統的建造物群保存地区 1245.4ha」を守備範囲として、景観保存に取り組む全戸網羅の住民組織。石川島汎用機械（現 IHI ターボ）在職中、イタリアで 2 年間勤務、このときヨーロッパ各地を見聞。公益社団法人日本ナショナル・トラスト協会専務理事。

英国人の散歩に見る「歩く文化」

～いち日本人主婦が見た英国流ウォーキング～

セツダ・シノ（イギリス在住 フットパス研究家）

歩くことが好きでたまらない英国人たち

ここ 10 年、世界中で「歩く」ことが再注目されています。デジタル革命により価値観や生活スタイルが大きく変化するなか、時間と情報に追われ続ける人々が、この最もプリミティブでアナログな行為に、ある意味救いを求めているように見受けられます。この新たなムーブメント、実は昔にも同じようなことが起こっています。18 世紀後半、産業革命の時代です。そして、そこから 200 年以上の月日をかけて、現在に至るまで「歩く」ことに並々ならぬ情熱を持ち、一大文化にまで発展させた国があります。それが今、私が住んでいる英国です。私は、たまたま英国人男性と結婚して、英国の田舎に住んで 15 年になります。住み始めてある日、「いつでもどこでも散歩している人が多いな」と気付き、「これは、なんなんだろう？」と疑問を持つようになり、日々観察してきました。今回は、いち日本人主婦の私が、彼らにとっての日常生活上でのウォーキング、「散歩文化」についてお伝えしたいと思います。

ここに一つ、興味深いデータがあります。日本の観光庁の「2019 年訪日外国人消費動向調査」で、一般客 1 人当たり旅行支出を費目別に見ると、中国の方々の買物代 5 万 3000 円が最も高い数値です。ただ、宿泊費は英国が最も高く、10 万 3,364 円。飲食費、娯楽などのサービス費も、英国人が一番消費しています。訪問者数は、中国などのアジアに比べると圧倒的に少ないにもかかわらず、日本にかなりお金を落としてくれていつている、ありがたい国であることが分かります。では、彼らは日本でお金を使って何をしているのか。Experience＝体験です。何かモノを買って得るのではなく、日本という東方のミステリアスな島国に滞在して、見て、聞いて、触って、食べて、日本文化とは何か、日本人がどんな生活をしているのか、自分の体を通して理解を深めていこうとする「体験型の旅」を楽しんでいるのです。そこで彼らはどんなスタイルの旅を好むのか……すばり「歩く旅」です。

英国には、大きく分けて 2 つのウォーキング文化があることをご存じでしょうか？ 一つは、日本でも慣れ親しんだアルピニズム。登山をメインとした、スポーツ的要素満載の歩きです。登頂、成功、制覇、踏破、達成という言葉が聞こえてくる、大きな目標や目的がある歩きです。もう一つは、目的が全くない野山歩き、ただ軽くその辺りをウォーキングするスタイル。つまり散歩です。とにかく彼らは、しょっちゅう散歩をしています。「Sport England Active Lives」によると、2019 年、イングランドでは、週に 2 回以上散歩する人が 1,960 万人、人口比率で言うと 35% います。この数字は、日常生活での歩きのみで、旅行や登山などの歩きは、含まれていません。しかも、去年 1 年で 50 万人増えたそうです。スコットランドでは、「Sports Scotland」が 2018 年に調べたところ、人口の 68% が 30 分

以上のレクリエーション歩きをしている、と答えています。今、ちょっとした散歩ブームです。世界の散歩人口の比較データがあるのか分かりませんが、英国は多分、世界で一番散歩する国だと思います。

では、その彼らの散歩がどんなものかと言いますと、ガンガン歩きまくる……といったアルピニズム的なものとは全く違い、ふらふら、ぶらぶら、ふらふら家の近くや旅行先で歩きます。「散歩や散策をしている」と日本語では言えるのですが、ちょっとニュアンスが違うように、私は感じます。歩いてどこかへ行こうとか、歩くことで何かを得ようとか、はっきりとした目的はなく、彼らはただただ、街中や自然の中を歩いているのです。頑張って歩こうとは、一切思っていない。散歩に飽きたら家に帰るし、途中で疲れたらパブに寄って飲んでしまう。「物見遊山」という言葉が、一番彼らの散歩スタイルに近いかもしれません。彼らは、歩くプロセスそのものを大切にしているようです。

そのためでしょうか、英語で「歩く」の意味を指す単語は、皆さんに馴染みのある Walking, Hiking, Trekking 以外に、Strolling, Roaming, Wandering, Ambling, Rambling, Scrambling, Stamping, Hillwalking, Fellwalking, Bushwalking, Tramping, Puttering, Sauntering, Mooching, Meandering, Moseying などなど、たくさんあります。意味はそれぞれ微妙に違いますが、ざっくり言うと「歩く」という意味になります。それだけ、彼らが歩くという行為に関心を寄せている証です。日常的な行為であり、意識を高く持っていることが、単語の数一つとっても言えるのではないのでしょうか。



英国を代表するナショナル・トレイルの一つ、サウス・ウエスト・コースト・パス

そんな英国の散歩は、具体的にどんな感じか。まず、私の体験をお話します。私が 15 年前に主人と結婚して英国に住み始めたころ、犬を飼いました。ジャックラッセル・テリアという、小さい体にターボエンジンを備えた、エネルギッシュな犬です。そのため、毎日しっ

かり散歩に連れて行かなくてはならない。そこで、主人と一緒に散歩に行くようになったわけですが、私も日本で犬を飼っていたので、犬の散歩には慣れていました。ただ、毎日毎日主人と歩きに行くたびに、今まで私が体験してきた犬の散歩とは、なんだか違うと感じ始めました。まず、近所の原っぱや農地、森、丘、川の岸边など、毎日違うエリアへ家から車で行く。そこに到着するなり、日本で馴染みの格好良いウォーキング・ブーツではなく、深緑のゴム製の長靴に履き替える。そして、犬をリードから放ち、犬も人間も歩きたい方向に勝手に歩いていくのです。例えば、日本人の私は躊躇してしまう、膝ぐらいまで伸びた麦畑のど真ん中を突っ切っていったり、放牧されている羊がいる中を平気で歩いたり。ときには、人様の庭に入ってしまったのです。これには驚きました。しかも、長靴は夏には蒸れるし、冬になると泥だらけになるし、歩きにくい。さらに、仕事がどんなに忙しくても、犬の散歩に1回で最低45分、長いときは2時間ぐらい、毎日行きます。天気も全く気にしない。

「今日は寒いし、雨も強そうだよ」と長い散歩をやめようと提案する私に、「へっ、それがどうしたの?」とかまわず、主人はどんどん歩いていってしまふ。「このダサくて、チープな散歩はなんなんだ?」と。ヨーロッパでは、もっとオシャレに犬と歩くイメージがあった私ですから、戸惑いました。「変な人と結婚したんだ」と思っていたら、彼の家族も全く同じことをしている。「今日はどこかへ飛ばされるぐらい、すごい風ねえ」とか、「暑くて、汗だくになりそう」と言いながら、義理の両親も、毎日ぶらぶら歩きに出かける。そんなこと言うなら、行かなきゃいいのにと、鬼嫁の私は思うのですが……。「変わった家族なんだな」と納得しようとしていたとき、ふと気付いたら、そういう変人たちが大勢外を歩いていたんです。これはただごとではないぞ、と思いました。そこから、英国のウォーキング文化に興味を持ち始めたのです。

歩く行為が文化へと発展する

この文化がどこから来たのか、多くの研究者が語っていますが、私は、やはり彼らが狩猟民族であることが大きいのではないかと考えます。英国人は、中世からハンティング、シューティング、フィッシングといった野外で遊ぶことを楽しんできました。特に王族、貴族がこれらをレクリエーションとして発展させてきました。散歩も昔は、お金と時間があり余っている上流階級のすることでした。英国において「スポーツ」という言葉の概念は、この「遊び」からきています。日本では、わざわざ「アウトドア・スポーツ」と言いますが、彼らの感覚としては、スポーツのベースには、「野外でアクティビティをする。思いっきり遊ぶ」という楽しいイメージが、根本にあるように思います。そして、18世紀末ごろに起こった産業革命により、その野外活動が一気に一般に広がり、労働者階級の人たちも、苛酷な仕事や生活環境から一時的に逃れ、リフレッシュしたいという強い思いを持ち始め、自然の豊かな場へと足を運び、それが一大ブームになっていきました。彼らにとって歩くことが、ただの交通手段からレクリエーションになったわけです。そして、スポーツの概念もコンペティション、フィットネスといった要素が加わったことで、歩く文化が、一つはアルピニズ

ムへと発展していきました。その一方で、昔、貴族が行っていたぶらぶら歩く散歩も、気軽に自然と触れ合えるということで、同時に独自の発展をしてきて今に至っています。英国の面白いところは、両方を究極にまで発展させたことです。これはほかのヨーロッパではない特徴です。

ただ、「歩いてリフレッシュしたい」というマインドだけでは、散歩文化は発展しません。歩ける場所が必要となります。彼らは行動に出ます。今まで通勤、通学などで使用していた歩行者専用道路「フットパス」を、レクリエーション用途に使えるようシステムを変えようと努力します。そして、戦後間もなく「Public Right of Way（通行権）」を法律で保証し、全国で登録されているフットパスを守れるようにしたのです。現在、このフットパスが英国の全国津々浦々に、毛細血管のようにあります。イングランドとウェールズにある全フットパスを合わせると約 22 万 5,000km。スコットランドは約 1 万 6,600km。まだ登録が完了していない歩道もありますので、今後さらに伸びると思われます。合計すると、大体地球を軽く 6 周できるぐらいの距離になります。

今日では、先人のお陰で、地元の人々がそれぞれのスタイルでフットパスを利用しているわけです。そのフットパスをつなげて長距離トレイル（彼らはレクリエーション・トレイルと呼びます）を造り、国内外から人々が歩きに來ています。ただ、あくまでも、すべてフットパスがベースになっており、長距離トレイルをわざわざ造ってはいません。フットパスを地元の人が歩くからこそ、フットパスが残り続ける。長距離トレイルは、その延長線上に存在しているだけなのです。必要とあれば、地元の人々で道のメンテナンスをする。イギリスはチャリティー大国ですから、彼らの力も借りる。ただ、ベースにあるのは、人がコンスタントに歩かなければ、どんなに立派な道でも消えていく、ということです。メンテだけでは、だめなようです。

さらに、限定されてはいますが、道によってはトレランを含めたランナー、サイクリスト、乗馬、車椅子、ベビーカーなども通ることができます。皆で道をシェアし、アウトドアの楽しみを共有し合っているわけです。そのあたりは、皆平等にと考える英国らしさがあります。例えば冬、馬が通過した後の道は凸凹になり、ぬかるみ、馬糞が落ちています。でも、誰も文句は言いません。犬の糞は、家畜や野生動物の健康への悪影響を考え、きちんと持ち帰るよう厳しく取り締まっていますが、馬糞は害がないので、いいそうです。田舎では車道にも落ちっていますが、誰も気にしません。放牧地も同じです。牛や羊の糞がそこら中にありますが、皆平気で歩いています。靴に着けば、後で洗い流せばいい。



家族全員で散歩する姿は、英国でよく見る光景

もしくは、その靴を外に置いておく。その点では、おおらかなんです。田舎のパブでも、長靴姿は普通です。ただし、長靴 OK のパブも、泥はきちんと落としてから。その辺のエチケットはあるようです。

そんな彼らは歩く格好も、まちまち。アウトドア・ギアやハンティング・ブランドの服でビシッと決めた人もいれば、その辺のスーパーで買ってきた長靴とウェアで歩く人もいます。背負っているリュックも、何かの景品で当たったかのような、ヨレヨレなものだったりもします。私の住んでいる所はヒッピーも多いので、裸足で歩いている人も見掛けます。ハロウィンやクリスマス近くだと、仮装して歩いている人もいます。千差万別、なんでもあり。こだわりのない。そして、法律で定められた歩く上での最低限のルールさえ守って

いれば、誰も何も言わないし、気にしない。むしろお互いを干渉し合わないよう、ある一定の距離を保っている。プライバシーを尊重する人たちです。

また、英国人の犬好きは知られていると思いますが、犬も多種多様。世界中の犬種が集まっているのではないのでしょうか。とにかく、彼らは昔からハンティング・バディとして、犬とともに生きてきましたから、犬の散歩で歩く人は多いです。人間も犬もののびのび歩いていて、実に楽しそう。そして、そのまま犬も一緒にパブに行ってしまうのです。私の家の近所に、丘の上にある眺めの良いパブがあります。夏の昼間は地元の人と観光客でいっぱいになり、大人たちに連れられた子どもと犬たちでごった返しています。きっと散歩ついでに寄った人、これから歩く前にランチと思っている人たちです。馬で来る人もいて、芝生で馬が休んでいるときもあります。日本人の私は、驚きとともにすごく平和な時間が過ぎているようで、幸せな気持ちになります。特に EU 離脱問題で揺れている英国でこういう光景を見ると、少し希望が見えてきます。



犬は英国ウォーカーたちの良い仲間。ただし、野生動植物を守るためにもしつけは厳しく

英国散歩を充実させるツール

このような自由な歩きを可能にする重要なアイテムの一つが、地図です。自由といっても、どこでも歩いていいわけではありません。先ほど述べたように、フットパスを歩くことが原則です。そのフットパスがどこにあるのか一発で分かるのが、英国陸地測量部が出している地図、OS Map です。一番メジャーなのが Explore シリーズの 2 万 5,000 分の 1 地図で、全国を網羅していて、全部で 403 冊あります。この地図に、緑の点線ですべてのフットパスが表示されているので、どこを歩いていいのか、すぐに分かります。最近はスマホなどのデジタル版も充実していて、紙とスマホの両方を使って出かける人が多いです。読図が得意でない私のような素人でも、簡単に道が分かります。この地図はマスト・アイテムです。だからでしょうか、この OS Map に馴れ親しんでいる彼らが海外へ歩きに行くと、ちゃんとした地図がないことをよく嘆いているのを聞きます。

それだけ歩くことにパッションを注ぐ国民性ですから、ウォーキングに関する情報も充実しています。ガイドブックやウォーキング専門雑誌はもちろん、一般紙の日曜版の中にあるトラベル・セクションには、内外のウォーキング体験の記事や情報が、ほぼ毎週掲載されています。全国紙だけではなく、地方紙、または地方自治体や町内会で出版している「〇〇おたより」的な新聞にまで、お勧めウォーキング情報とフットパスの整備状況が必ず載っています。観光案内所に行けば、〇〇Walk という散歩レベルから本格的ハイキング・コース案内がありますし、ガイド・ウォークも盛んです。宿泊するホテルや B&B（英国版民宿）には、宿泊施設のご利用案内のファイル内に、施設利用の際のルールなどの記載とともに、

必ず周辺のフットパス、お勧めウォーキング情報が入っています。それによって地元民だけでなく、必ずそこを訪れた人々にも歩いてもらえるのです。

初めに、英国人はぶらぶら歩いている、と書きましたが、ただボーッと歩いてるわけではありません。彼らは、地元に関することをよく知っていますし、大変興味を持っています。あの植物がどうしてそこに咲いているのか、なぜあの石が鎮座しているのか、この教会は誰が建てたのかなどなど……。お堅く言えば、地学、自然科学、人文地理学、歴史学、文化人類学、生物学、エコロジー、園芸、芸術などの面で、自分の住んでいる地域を熟知しています。特に歩くことが好きな人々（きっとその方々が、日本へ歩く旅に来られるターゲット）には、それが当たり前のようです。これは、子どものころからの学校教育の影響もあると思います。歩いている間にそういったものをよく観察する。つまり、一人一人が、それぞれフィールド・ワークしている。そして、それらについて家族、友人、近所の人々、と



森の地図と動植物の情報を読んでいる親子

きには初めて会った人とよく話をしています。暮らし始めたころ、私は「つまらない話だなあ」と退屈していましたが、これがのちのち、どれほど英国人にとって重要なことなのか、私は理解していくのです。これを密かに「半径 2km 圏内トーク」と私は言っています。この彼らにとって大事な社交が、道でも、バブでも、家でも、スーパーでも、年がら年中、行われているのです。そして、彼らが旅行先でも求めるものが、そのフィールド・ワークのような「体験型歩き」なのです。己を知っているから、他人を知ることができる。海外も含め旅行先で、自分の住んでいる地元の「半径 2km 圏内」と、今、自分が立っている土地の「半径 2km 圏内」とどう違うのか、比較して楽しむ。いつも興味津々です。この記事を読んでいる人の中には、ガイドの方々もいらっしゃると思いますが、欧米人たちをガイドする場合、もちろん英語を話せばビジネスは広がっていきますが、さらに連れて行く先々の地形、地質、歴史、動植物、建築、風土、地場産業などの知識があると、彼らから絶大な信頼を寄せられること、間違いなしです。彼らはそのあたりを、ガイドに求めてくると思います。

日本のトレイル文化の可能性

英国は、生活に根差したウォーキング文化、散歩が全国どこでも行われている唯一の国と言っても過言ではありません。同じ島国の日本とは、西と東とで大きな違いがありますが、コンパクトな国土、歴史が長い、自然愛が強い、独自の文化が発展、大陸国に対するプライ

ド、古いものを大切にする、国立公園のあり方など、多くの共通点もあります。この生活に根差したウォーキングは、日本でも大いに参考になるのではないかと考え、今回、この記事を書かせていただきました。

日本は、英国以上にとても豊かな自然と文化があるユニークな国であり、トレイルにおいてもポテンシャルはかなり高いです。最近日本では、散歩関連の書籍やテレビ番組が人気を博していると聞きました。ただ、歩くブームも一時的なものではなく、日本独自のトレイル文化へと発展できるよう、皆で知恵を出し合う必要があると思います。それには、それ相応の時間が掛かることを覚悟しなくてはなりません。英国でも、200年は掛かっています。そのため、この流れを代々継いでいく人たちを育てるのが重要です。そして、国内外からのトレイル利用者から学び、「ハイブリットな歩く文化づくり」が必要だと考えます。それには、まずトレイルを管理している人たち、地元の人たちが、それぞれのトレイルをよく知ること。サポートだけでなく、自分たちでトレイルを歩き続け、常に状況を把握し、そして何よりもトレイル愛を育てて欲しいです。そうすれば、自然と人々が歩きに来たくなるようなトレイルになると思います。

新型コロナウイルスで、今、世界は混乱状況にあり、この原稿を書いている時点では、今年の東京オリンピックが開催できるのかは、まだ分かりません。開催できたとしても、インバウンドの波は、予測していたものよりかなり穏やかなものになるかもしれません。ただ、日本のトレイルが消えるわけではありません。また世界中の人々の、日本を歩きたいと思う気持ちが変わることはありません。予定より少し時間が掛かるかもしれませんが、きっと皆さんが歩きに来るはずです。

そこかしこで自粛ムードが拡大し、閉塞感と先行き不透明感によるストレスで、せっかくの春を迎えるのに、悶々とした雰囲気が漂っています。こんなときこそ、お金を掛けず、手軽にでき、ウイルス感染のリスクも低い「散歩」でリフレッシュするのは、一つのアイデアかもしれません。まずは、自分たちの身近な所から歩いてみませんか。歩くことが、トレイル造りの基本ですから……。

セツダ・シノ

1970 年東京生まれ。英国・ファルマス大学大学院広告学科卒。約 13 年間、日本において国内外のテレビ・映像制作に、グラフィック・デザイナー、プロモーション・プロデューサーとして携わる。2004 年に渡英し、イングランド南西部にあるサマセット州に在住。ガーディナーとして活躍するかたわら、英国をさらに理解するためにウォーキング文化を日々観察し、ウェブサイト「足で感じるブリテン島・Rambler Aruki」(rambleraruki.com)にて、レポートをアップし続けている。

安藤財団が行う「ロングトレイル振興」の取り組みについて

荒金 善一（安藤スポーツ・食文化振興財団 事務局次長）

公益事業の4つの柱

チキンラーメンやカップヌードルを発明し、世界の食文化に革新をもたらした日清食品創業者・安藤百福は、1983年に私財を提供し、安藤スポーツ・食文化振興財団を設立した。以来、「子どもたちの健全な心身の育成」を願って、陸上競技活動、自然体験活動、食文化活動、安藤百福発明記念館運営の4つを柱とした公益事業に取り組んでいる。

陸上競技活動では、日本陸上競技連盟主催の「全国小学生陸上競技交流大会」（1985年スタート）と「全国小学生クロスカントリーリレー研修大会」（1999年スタート）を第1回から後援してきたが、2020年度より両大会は統合し、より充実した内容に生まれ変わる。また、「安藤財団グローバルチャレンジプロジェクト」を実施し、国際大会でメダル獲得を志す若手アスリートの海外挑戦を支援して、日本陸上競技界の裾野の拡大から、トップレベルの選手育成まで幅広い支援を行っている。

食文化活動では、1996年より「食創会」を主宰し、新しい食品の創造につながる独創的な基礎研究や食品開発、ベンチャー事業を奨励し、毎年「安藤百福賞」を贈り、表彰している。

2つの発明記念館（愛称：カップヌードルミュージアム）では、インスタントラーメンの歴史と発展に関する展示や体験工房を通じて、子どもたちの創造力や発明心を育み、「発明・発見の大切さ」を伝えており、2020年度中に池田記念館（1999年開館）、横浜記念館（2011年開館）の両館合わせて、2,000万人目の来館者を迎える予定だ。

自然体験活動支援については、後述したい。



カップヌードルミュージアム 横浜



カップヌードルミュージアム 大阪池田

自然体験活動

安藤財団では、1983年の設立当初より、安藤百福の「自然とのふれあいが、子どもたちの創造力やチャレンジ精神を育む」という考えに基づき、自然体験活動の普及に努めてきた。

(1) トム・ソーヤースクール企画コンテスト

当初は、「トム・ソーヤースクール」と名付けたアウトドア活動を全国各地で行い、子どもたちの自然体験活動を支援してきたが、2002 年からは、子どもたちが行う自然体験活動をさらに広げるため、文部科学省の体験活動を推進する教育指導方針に沿い、全国の学校や団体が企画する自然体験活動を支援・表彰する「トム・ソーヤースクール企画コンテスト」を始めた。

このコンテストは、全国の学校や団体から自然体験活動の企画を公募し、6 月中旬に応募の中から 50 団体を選考し、実施支援金として各 10 万円を贈呈。さらに、支援団体から提出された実施報告書を審査し、優秀団体を表彰している。

2002 年の第 1 回から、これまでの 18 年間の応募数は 3,044 団体で、65 万 7,000 人の子どもたちが活動に参加した。そのうち 820 団体に実施支援金を贈呈し、約 25 万人の子どもたちが支援金補助のもとで活動を行った。また、2019 年度の応募数は 214 団体で、6 月に 50 団体を選考、実施支援金を贈呈し、10 月までに延べ 1 万 600 人の子どもたちが体験活動を行った。例年 1 月下旬、カップヌードルミュージアム横浜で、文部科学大臣賞（学校部門）、安藤百福賞（一般部門）などの優秀団体を表彰している。毎年、①熱心に子どもたちを指導した教員の奮闘ぶりが目立った活動、②自然や多くの人とのふれあいを大切にした活動、③自然への理解を深める冒険的要素の強い活動などが授賞している。



子どもたちの自然体験活動を支援

(2) 「歩育」の促進

自然体験活動は、山・川・海など、どのフィールドでも「歩く」ことが基本であると考え、2014 年度から特定非営利活動法人日本ロングトレイル協会と連携して、「歩く文化」の普及・振興とそのための安全対策を支援している。

前述のトム・ソーヤースクール企画コンテストでは、活動の目標達成に向けて、子どもた

ちが山に登り、海や川を泳ぎ、キャンプを楽しむなど、自然に囲まれた環境の中で活発に歩き回る体験活動の応募が多い。子どもたちが歩くことを多く取り入れた体験活動を実施する中で、協調性や創造力、自活力を養うことが「歩育」であり、安藤財団は長年にわたり企画コンテストを通じて「歩育」を促進している。



パノラマトレイルを歩く

(3) 安藤百福センター

2010年5月、安藤百福生誕100年を記念し、長野県小諸市に「安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター」が開設された。センターが小諸市に建てられた理由は以下のとおりである。

- * 首都圏から近く、交通の便が良いこと
- * 自然が豊かであり、地勢的・季節的な活動が可能で、四季を通したアクティビティが可能なこと
- * 当該地およびその周辺に動植物の多様性が見られること
- * 夜間の光源が少なく、夜空が美しいこと
- * 周辺の自治体、関係機関からの協力・支援が得られやすいこと

当初、センターは浅間山麓に建設予定だったが、検討の末、浅間連峰を望む700mの丘陵地に建設されることになった。小諸市から市有地を紹介していただき、2008年2月、建物の設計を依頼する隈研吾氏、土地所有者である小諸市・芹澤市長（当時）、財団安藤宏基理事長ほかで視察に行った。前夜に降った数十cmの雪を、小諸市の職員に早朝から除雪していただき、ラッセルの必要もなく眼前の浅間連峰の雄姿に感動しつつ、快適な視察ができた。

今でこそ森には整備の手が入り、光が差し込んで見違えるような落葉広葉樹の森に変貌したが、長年、当地は耕作放棄地であった。建物は、①環境に配慮したローインパクトな造成と設計、②周囲の自然環境と調和したデザイン、③遠方から見ても存在感のある建物の3

点を設計コンセプトにして完成した。現在も、隈研吾氏の作品を見学するために、建築を学ぶ多くの学生たちがセンターを訪れている。

余談になるが、建物北側に面してサクラとクリの古木が生えていた。しかし利用者が浅間連峰を眺望する妨げになるので、伐採の決断をした。その2本の木は乾燥・製材後、今では立派なテーブルとしてセンターで役立っている。



造成前の森



伐採前のサクラとクリ

敷地内の森を散策していると、ケヤキやコナラなどの落葉広葉樹が多く見られ、建物東側にはカラマツやスギの植林地が広がる。また、隣接する尾根上にはアカマツがまとまって見られ、建物南西側にはハチク林が繁茂し、クリの古木も点在している。随所に石積みが見られるが、これは戦前より地元で盛んに行われた養蚕業を支えた、桑を栽培する段々畑の名残りで、まるで城址の石垣の遺構のようだ。苛酷な石垣造りの作業に、先人たちの苦労がしのばれる。石積みは年数を経て森に馴染み、動植物の生息・生育場所として役立っている。

また、森のシンボリックなポイントとして、高さ5mほどの巨石がどっしりと鎮座している。浅間山の火山活動できたのではなく、どうやら南に位置する蓼科・八ヶ岳方面から流れてきたのだろう、と地元の人から聞いたことがある。現在、その巨石をフィールドにして、子どもたちが楽しくボルダリング（巨石のクライミング）を行っているが、一度、流れてきたルートを探ってみたいと思っている。



段々畑の石積み



遠く八ヶ岳方面から流れてきた巨石

ロングトレイル振興

(1) 浅間・八ヶ岳パノラマトレイル

安藤百福センター開設の 2010 年後半から、野外研修フィールドの一環として、近隣でのトレイル造りを始めた。地図とにらめっこしては、何度も現地を踏査し、森の小径や田んぼの脇道、農道などをつないで、「浅間・八ヶ岳パノラマトレイル」4 コース（総延長 23km）が完成し、道標設置とマップ製作を行った。

安藤財団がロングトレイル振興を支援するきっかけの一つになったのは、雑誌『日経トレンドイ』の 2013 年ヒット予測ランキングに、「日本流ロングトレイル」が堂々の 1 位に選出されたからだ。「欧米主流の『歩く旅』が日本の文化と融合して大きく花開く。健康、食……巨大トレンドを巻き込み地域観光の起爆剤になるだろう」が、ヒット予測第 1 位の選定理由だった。

(2) ロングトレイル振興

2015 年度より安藤百福センターでの取り組み事業は、アウトドア活動のトレンドとマッチさせ、分かりやすく「ロングトレイル」をキーワードとした。以来、子どもたちの自然体験活動を推進するための人材育成や、アウトドア活動（特にロングトレイル）を普及することを目的とした事業を展開している。ロングトレイル振興の主な取り組みは、以下のとおりである。

- | | |
|--------|--|
| 2011 年 | 浅間・八ヶ岳パノラマトレイル 4 コース開通
「ロングトレイル」商標登録（広く正しく使用してもらうため） |
| 2013 年 | ロングトレイルシンポジウム（以後、毎年共催）
橋谷晃さんと歩くトレッキング講座（年 2～3 回主催、2018 年まで継続） |
| 2014 年 | 小諸ツリーハウスイベント（以後、毎年主催）
スマホ web サイト「ロングトレイル巡り」運用開始（9 トレイルが参加） |
| 2015 年 | ロングトレイル協会が NPO 法人として認証
ロングトレイル協会のロゴ作成と商標登録
ロングトレイル協会事務局を安藤百福センター内に設置 |
| 2016 年 | みんなでダイヤモンド浅間を見に行こう！（以後、毎年主催）
みんなでパール浅間を見に行こう！（以後、毎年主催）
ロングトレイルハイカー入門講座（全 7 回）（以後、毎年共催） |

2017 年 ロングトレイルのつくり方講座（全 3 回）（以後、毎年主催）
大人のトレイル歩き旅講座（全 3 回）（以後、毎年主催）
浅間・八ヶ岳パノラマトレイル新コース（千曲川コース）開通イベント

2018 年 「JAPAN TRAIL」プロジェクトの支援、商標登録、ロゴ制作
スマホアプリ「トレイル巡り」運用開始（9 トレイル）

2019 年 子どもクライミング教室（年 2 回主催）
子どもトレイル教室 小諸市教育委員会との共催

（3）「JAPAN TRAIL プロジェクト」支援

安藤財団は、2018 年度から全国のロングトレイルや自然歩道などを結び、九州から北海道まで日本列島を一本道でつなぐ「JAPAN TRAIL プロジェクト」を支援している。

同年 9 月、一定の商品や役務において「JAPAN TRAIL」と「日本トレイル」の商標登録を終え、同時にロゴデザインを制作した。安藤百福センターにおいて、JAPAN TRAIL プロジェクト会議を年 3～4 回開催し、現在は 50 万分の 1 の地図上にルートを落とし込んで設定した状況だ。

今後は、さらに全国の自然歩道を管理する環境省や林野庁、そして、ロングトレイル運営団体との連携を密にして、現地でのデータを収集する作業や実現に向けて検証作業を行い、机上から現場へとプロジェクトを発展させる予定だ。安藤財団は、JAPAN TRAIL プロジェクト会議や現地データ収集に関わる費用支援のほか、必要性和タイミングを考慮しながら、ホームページ制作、②スマホアプリ「JAPAN TRAIL マップ」制作、③道標の設置、④ルート誘導シール作製などの支援を続けていく計画であるが、その内容について検討しているところである。



荒金 善一（あらがね よしかず）

1956 年、兵庫県尼崎市生まれ。大阪市在住。高校時代は登山部、大学時代はワンダーフォーゲル部に所属し、登山や山スキーに親しんできた。1980 年、日清食品(株)に入社し、営業および総務畑を歩み、2007 年より公益財団法人 安藤スポーツ・食文化振興財団（大阪府池田市）に勤務し、自然体験活動をはじめ、子どもたちの健全な心身の育成に係わる事業を推進している。趣味は登山、ゴルフ、ランニング、歴史探訪。2013 年より年 2 回程度、四国八十八ヶ所の歩き遍路を行っている。

事業報告

事業総括

2019 年度は、主催・共催合わせて 23（延べ 35 日）の事業を予定していたが、浅間山の噴火や台風 19 号、また、新型コロナウイルスなどの影響により、8 つの事業が中止となった。

トレイルをテーマとした講習会は大きく 3 つ行った。4 年目となる「ロングトレイルハイカー入門講座」（歩き方を学ぶ内容、全 5 回）は、年を追うごとに申込み者が増え、幅広い年代の方に学んでいただくことができた。参加者同士の輪も広がりつつあり、それぞれの地元に戻ってから交流が行われているという話も励みになる。

3 年目となる「大人のトレイル歩き旅講座」（楽しみ方を学ぶ内容、全 5 回）は、料理人や写真家、イラストレーターなど、一芸に秀でたスキルを持つ講師とトレイルを組み合わせた内容。トレイル×〇〇の幅は広く、今後もさらなるバリエーションを持たせた講座にしていきたい。

同じく 3 年目となる「ロングトレイルのつくり方講座」（つくり方を学ぶ内容で、全 1 回）は、新型コロナウイルスの影響で中止となってしまったが、定員 30 名に対し 50 名以上の申し込みがあり、関心の高さに驚かされた。

今年もトレイルに関する様々な講座を行ってきたが、コンテンツが増えてきたので、この辺りで一度整理する（体系化するなど）ことが必要な時期かもしれない。例年にも増して受講のニーズは高まっているので、継続していくのが望ましいだろう。

年に 1 回行っているロングトレイルシンポジウムも同じく中止になってしまったが、140 名ほどの申し込みをいただいた。「インバウンドとロングトレイルの可能性」というトレイル運営者向けのテーマだったので、一般の申し込みが少なかった半面、観光関係者の申し込みが殺到した。「歩く観光」への期待が強く感じられた応募状況だった。

地域資源の掘り起こしを目的としたダイヤモンド浅間、パール浅間（ともに 4 年目）は、晴れていないと満足感が得られない企画だが、参加のニーズは高く、申し込みが途切れない。夜間のアウトドアを皆で安心して堪能できるというメリットもあるのだろう。

新企画として、クライミング・タワーを活用した子ども向けの体験教室を開催した。募集開始から申し込みが殺到し、すぐに満員となった。オリンピック種目になった影響もあるかもしれない。また、小諸市教育委員会との共催として、トレイルを歩いて発見したことをノートにまとめるという夏休み企画も行った。あまり知らない自分の地域のことを学ぶ、いいきっかけになったに違いないはずだ。

2019 年度は新たに子どもを対象とした企画が増えた。来年度も、主に「歩く」ことをベースとした講座・イベントを企画し、幅広い世代がアウトドアで楽しんでもらえるよう尽くしていきたい。

第7回ロングトレイルシンポジウム

新型コロナウイルスの感染拡大が懸念される中で、来場者および登壇者の健康や安全を最優先に考慮した結果、開催を中止させていただくことになりました。定員 100 名に対し、およそ 140 名の方にお申し込みいただきました。

■開催予定内容

テーマ「インバウンドとロングトレイルの可能性」

日本を訪れる外国人旅行客は増加傾向にあります。そして、従来型の観光だけではなく、自然や伝統文化を求めるニーズが台頭しつつある状況の中で、日本の自然を歩くロングトレイルが注目されています。今回は、長年インバウンド観光を専門に行っているポール・クリスティ氏を基調講演者に迎え、多様なゲストとともにロングトレイルがどのような役割を担い、貢献できるのかを考察します。



日 時：2020年2月22日(土) 13時30分～17時30分
会 場：安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター（略称：安藤百福センター）
主 催：特定非営利活動法人 日本ロングトレイル協会
共 催：公益財団法人 安藤スポーツ・食文化振興財団（略称：安藤財団）
安藤百福センター
後 援：環境省、観光庁、林野庁、文化庁、長野県、長野県教育委員会、小諸市、
小諸市教育委員会、一般財団法人全国山の日協議会
特別協賛：ミズノ株式会社

◇プログラム（順不同・敬称略）

1. ご挨拶

安藤 宏基（安藤財団 理事長）

2. 来賓ご挨拶

小泉 俊博（小諸市長）

3. 解説

中村 達（日本ロングトレイル協会 代表理事、安藤百福センター センター長）

4.基調講演

「田舎の資源を活かしたインバウンド観光 ～Walk Japan の 28 年の歩み～」

ポール・クリスティ (Walk Japan CEO)

1961 年イギリス生まれ。ロンドン大学にて経済学部、同大学東洋アフリカ研究学院にて日本語を専攻。1987 年に日本語の勉強のために初来日。1989 年からは日本経済新聞のアナリストとしてや、日本のテレビ番組のフリーランス・プロデューサーなどとして、東京とロンドンを行き来し、2002 年に大分県の国東半島に移住。同年に Walk Japan の CEO に就任。同社の提供するトレッキングを中心としたツアーを通じて、訪日観光客に知られざる日本の真の姿を紹介している。家族とともに東京在住。

5.報告

「ロングトレイルの可能性～豊かな自然と文化による創造的人材の育成～」

坪田 知広 (文化庁 参事官)

「森林と人との新たな関係を繋ぐ【森林サービス産業】とロングトレイルの未来」

木下 仁 (林野庁 森林整備部森林利用課 山村振興・緑化推進室 室長)

「英国フットパスの風景」

セツダ・シノ (イギリス在住フットパス研究家、日本ロングトレイル協会アドバイザー)

6.パネルディスカッション

「これからのインバウンド対応を考える」(仮)

藤原 義則 (妻籠を愛する会 理事長)

山岡 研一 (国東半島峯道トレイルクラブ 顧問)

相澤 久美 (みちのくトレイルクラブ 常務理事)

節田 重節 (日本ロングトレイル協会 会長)

コーディネーター：河崎 仁志 (金沢トレイル連携協議会 理事長)

7.報告

「山の日とロングトレイル」

磯野 剛太 (全国山の日協議会 理事長)

「安藤財団が行うトレイルの取り組み」

荒金 善一 (安藤財団 事務局次長)

「日本ロングトレイル協会からのお知らせ」

村田 浩道 (日本ロングトレイル協会 理事・事務局長)

■中止の報道（放送・掲載日は全て2020年2月18日）

NHK NEWS WEB

2020年（＝

信州 NEWS WEB

集会自粛で観光シンポジウム中止

02月17日 20時03分

新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐため、厚生労働省は不要不急の集会は自粛を検討するよう呼びかけています。

こうした中、今月22日に小諸市で、観光関係者向けに開催が予定されていた「ロングトレイルシンポジウム」について主催する「日本ロングトレイル協会」は17日、中止を決めました。

シンポジウムは自然の中を歩いて観光する「ロングトレイル」を活用した外国人観光客の誘致などをテーマに行われる予定でしたが、シンポジウムを共催する小諸市の「安藤百福センター」によりますと、来場者およそ140人の健康や安全を最優先するため苦渋の決断をしたということです。

シンポジウムは7年前から毎年開かれていますが、中止になるのは今回が初めてだということです。

NHK

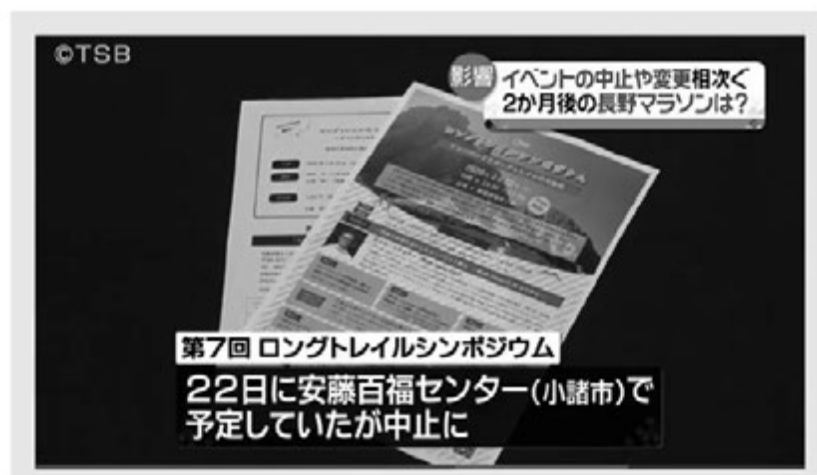
新型コロナ イベントの中止・変更相次ぐ

この記事シェア



長野

2020.02.18 21:16



新型コロナウイルスの感染拡大を受け、信州大学医学部付属病院は、21日に医療機関を対象にセミナーを開く予定だったが、自宅などで視聴する方法に変更。また、日本ロングトレイル協会は22日に予定していたシンポジウムを中止する。

テレビ信州

『新型コロナ』感染拡大受け 長野県内各地で週末のイベント中止や延期の動き...

2/18(火) 21:14配信

NBS 長野放送



長野放送

新型コロナウイルスの感染拡大を受け、長野県内でも人が集まるイベントの中止や延期などの動きが出ています。

今月22日に小諸市で開催予定だった「ロングトレイルシンポジウム」が中止に。また、上田市が神奈川県内で予定していた観光PRも延期します。長野市で週末行われる「氷の彫刻展」は、開催する予定ですが、「来場者に咳エチケットや手指消毒の徹底を呼び掛ける」としています。

長野放送

小諸トレイルシンポ中止
上田市の観光PR活動も

新型コロナウイルスによる肺炎の感染拡大を受け、小諸市の安藤自衛記念自然体験活動指導者養成センターは17日、同センターで22日に予定していた「第7回ロングトレイルシンポジウム」の中止を決めたと発表した。上田市も、22・23日に横浜市の東急田園都市線たまプラーザ駅で予定していた「信州上田観光キャンペーン」を中止すると発表した。

シンポは、同センターに事務局を置くNPO法人が主催し、専門家の講演やパネル討論を計画していた。参加予定だった県内外の約140人には、中止を伝えたという。

信濃毎日新聞

ロングトレイルのつくり方講座

ロングトレイルの運営団体および観光地のゲストスピーカーからインバウンド対応の現状を学び、国際化を視野に入れたトレイル整備について考察することを目的に企画した（ロングトレイルシンポジウムの翌日）。

シンポジウム同様、中止とさせていただきます。定員 30 名に対し、50 名以上のお申し込みをいただきました。

■概要

日 時：2020 年 2 月 23 日（日）9 時 30 分～12 時

対 象：ロングトレイルを整備・運営したい自治体や団体、観光協会など

募 集：30 名（最少催行 10 名）

参加費：1,000 円

主 催：安藤百福センター

共 催：日本ロングトレイル協会

テーマ：「インバウンド対応の今とこれからを語る」

講 師：奥原 幸（上高地西糸屋山荘 社長）

佐伯 雅視（北根室ランチウェイ 会長）

木村 宏（信越トレイルクラブ 代表理事）

山岡 研一（国東半島峯道トレイルクラブ 顧問）



昨年度の様子

ロングトレイルハイカー入門講座

主催：NPO 法人アウトドアライフデザイン開発機構

共催：安藤百福センター

■趣旨：初心者ハイカーを対象に、ロングトレイルの歩き方を学ぶことを目的として開催した。2016年度より開催しており、今年で4年目。事前の計画、装備などの準備編から、楽しみ方、地図読み、天気図、トラブル対処などの実践編まで、歩き方の基本が一通り学べる構成となっている。

■講師：山口 章（やまぐち あきら）

公益社団法人日本山岳ガイド協会認定ガイド、クライミング・インストラクター

京都府出身、東京都在住。山と溪谷社『山と溪谷』編集長、山岳図書編集部長、事業部参事などを歴任。NPO 法人アウトドアライフデザイン開発機構代表理事、NPO 法人浅間山麓国際自然学校顧問。中学時代より登山を始め、ワンダーフォーゲル部、山岳部で国内の山々を登り、海外ではモン・ブラン、マッターホルンなどを登る。登攀経験も豊富。主な著書は『社会と環境教育』東海大学出版会（共著）、『自然との共生をめざして』ぎょうせい（共著）など。



第1回 事前準備と歩き方を知ろう

日時：2019年6月8日（土）13時～9日（日）15時

内容：1日目（机上） 計画の立て方、装備の基本、歩き方（ストック実習を含む）
ロングトレイルとは何か（安藤百福センターセンター長 中村達）

2日目（実習） 浅間・八ヶ岳パノラマトレイル「軽井沢コース（約13km）」

募集：20名（参加者18名、申込者22名）

■活動レポート1日目



ロングトレイルに興味のある方々が今年も集まった。年齢も性別もバラバラだが、講座に臨む姿勢は同じ。まずはロングトレイル・ウォークに必要な装備や準備、情報の集め方などを学ぶ。ウェア・ギアの実物や講師の体験談を交えての講義に、参加者の目は爛々。



続いて、野外にて実習「トレッキング・ポールの使い方」。講師の後を歩きながら、正しい長さや、斜面、段差での使い方などを教わる。普段は使わないという人も、レンタル・ポールを手に敷地内を散策した。



最後に安藤百福センターのセンター長で、日本ロングトレイル協会の代表理事でもある中村達より、「ロングトレイルとは何か」というタイトルで講義があった。国内外のトレイルの紹介や、ジャパントレイル構想などが参加者の興味を誘った。



1日目の夜には、参加者同士の交流や情報交換を目的とした懇親会が開かれた。炭火焼きの野菜や、敷地内で取れたタケノコ、豚肩ロースの塩釜焼きなどが食卓に並んだ。参加者からも差し入れのお酒やおつまみがあり、会話に花を添えていた。初対面同士でもすぐに打ち解けられるのは、やはり共通の話題があるからだろう。

■活動レポート 2 日目



2 日目は生憎の雨模様。レインウェアとザックカバーを着けて出発。約 13km の軽井沢コースは、日本に 3 ヶ所しかないと言われる烏明神やおうけつ錨穴など、見どころには事欠かない。



前日に教わった歩き方やトレッキング・ポールの使い方を実践しながら登り切り、離山山頂にて記念写真。晴れていれば近くに浅間山が見えたはずのこのコース。代わりにしっとりとした軽井沢の新緑を満喫し、解散となった。

■参加者の声（アンケートより）

- * 山道や舗装路などいろいろな道を歩けたのが勉強になった。
- * 座学を通して実際に山へ登れてよかった。
- *（講師の説明に対して）エピソードなど、一人では知り得なかったことが聞けてよかった。
- * 土地勘がないので、所々で現在地の確認をしてもらえると、コースの全体がイメージできて、もっとよかった。

第 2 回 天気と地図の読み方を学ぼう

日 時：2019 年 7 月 27 日（土）13 時～28 日（日）15 時

内 容：1 日目（机上） 読図、コンパスワーク、気象

2 日目（実習） 池の平口～竈ノ登山～水ノ塔山～高峰山～車坂峠（約 9km）

募 集：20 名（参加者 17 名、申込者 22 名）

■活動レポート 1 日目



まずは晴れているうちにコンパスワークを練習。コンパスの使い方、目標物の見付け方を習ったところで地図読みを学んだ。マーカーで塗り分けながら、明日歩く予定のコースの地形や植生を読む。



答え合わせは現地に行ってから……と思ったが、参加者の一人が浅間連峰の立体地図を持参してくれた。地図と地形を見比べて、きちんと地図が読めていたか確認。



気象講座の導入は、窓からの景色の解説。見える雲の名前や明日の天気を予想して、講義に入る。

事前配布資料はあったものの、やはり気象は難しいらしい。困り顔もちらほら目に付いたが、天気図クイズは多くの参加者が楽しめたようだ。



顔見知りとなった参加者も、今回が初めての参加者も、乾杯！ 写真はビールで内側から蒸し上げるビア缶チキン。ほか数々の料理に舌鼓を打ち、夜遅くまで語らいは続いた。

■活動レポート 2 日目



2 日目は池の平口からスタート。登り始めてしばらくすると、「静かに！ オコジョがいますよ！」と講師が一声。ひょこひょこと走り回り、岩の間から顔を出しこちらをじっと見詰めるオコジョの愛らしい姿を、しばし足を止めて観察した。



東箒ノ登山に到着。山頂では早速、昨日学んだコンパスワークを実践。周りの山の名前を、コンパスを使って確認した。参加者同士で相談したり教え合う姿も見られ、皆それぞれに真剣だった。



東箒ノ登山、水ノ塔山を縦走し、高峰温泉へ下りたところで雷警報が。天気の流れを恐れて高峰山は行かないこととし、車坂峠まで歩く。振り返れば歩いてきた山が一望できた。一日の健闘をたたえ合い、解散となった。

■参加者の声（アンケートより）

- * 読図はほかの講座でも受けたことがあるが、どれよりも詳しくかった。
- * （コースについて）アップダウンがあり、樹林帯もあり、景色も良くよかった。
- * 岩や崖など、地図で見た所を実際に確認できてよかった。

第 3 回 トラブル対処法を身に付けよう

日 時：2019 年 9 月 7 日（土）13 時～8 日（日）15 時

内 容：1 日目（机上） 救急法、セルフレスキュー

(実習) キネシオ・テーピング (赤沼将充氏)

2 日目 (実習) 浅間・八ヶ岳パノラマトレイル「千曲川コース (約 15km)」

募 集 : 20 名 (参加者 19 名、申込者 28 名)

講 師 : 赤沼将充氏 (赤沼整骨院 院長)

■講師プロフィール

赤沼 将充 (あかぬま まさみつ)

柔道整復師の資格取得後、整形外科、整骨院での研修を経て、2008 年、長野市で赤沼整骨院を開院。キネシオ・テーピングを取り入れた治療を行っている。

自身の足のトラブルをきっかけに足の重要性を実感し、治療のためにインソールの作製を行い、正しい靴のアドバイスやシューズ・フィッティングの普及に力を入れている。



■活動レポート 1 日目



まずは参加者自身が遭遇したことのあるトラブルを紹介。道迷いや滑落などが隣にいる人にも起きたと知り、講義に挑む姿勢は真剣なものになる。

トラブルを起こさないために、そして、起きてしまったらどうするべきか、1 時間ほどかけて学んだ。



続いて赤沼整骨院の赤沼将充院長によるテーピング実習。キネシオ・テープを使い、怪我予防やパフォーマンス向上のためのテーピングを学ぶ。

膝の裏、足の裏、ふくらはぎなど、気になる箇所はそれぞれに違う。疲労回復にも効果があるとのことで、明日の実習が楽しみになる参加者たちだった。



懇親会ではパエリア、タコとジャガイモのガリシア風ホイル焼き、鰯の燻製クリームチーズディップなどを囲んで乾杯した。懇親会が楽しみで……と語る参加者も。夜も更けてきて翌日が心配だが、会話は弾み、話題は尽きなかった。

■活動レポート 2 日目



第 3 回にしてようやくの快晴！ 浅間・八ヶ岳パノラマトレイルの千曲川コースは約 15 km。小さな集落を抜け、色付き始めた田んぼを道連れに、小諸に住む人々の生活や歴史を身近に感じながら歩く。



講師による解説は秋の七草や養蚕文化、吉永小百合が訪れて CM を撮影したという古い吊り橋など多岐にわたった（なお、この吊り橋は 10 月に襲来した台風 19 号で崩壊している）。



コースの締めは氷集落の風穴。暑さ厳しい 1 日の行程を乗り越えたからこそ染み渡る冷気に、一同足から根が生えたように動けない。冷やしておいたジュースで自然の冷蔵庫の威力を体感し、トレイル・ウォークは無事終了となった。

■参加者の声（アンケートより）

- *キネシオ・テープの効果が実感できた。
- *暑さやアップダウンがきつかったが、楽しく歩けた。
- *機会がなければ訪れられない集落の中を歩いてよかった。
- *参加者の実体験に基づくトラブルの事例が聞けたので、トラブルは誰にでも起こりうる身近なことだ、と感じられた。

第4回 ロングトレイルを縦走しよう ※台風19号の影響を受けて中止

日時：2019年10月26日（土）13時～27日（日）15時

内容：1日目（実習） センター～糠地～みはらし交流館（約7km、テント泊）

2日目（実習） みはらし交流館～深沢溪谷～高峰温泉（約10km）

※市道6301号線通行止め（落石および土砂崩壊のため）につき変更

⇒1日目（実習） 車坂峠～高峰山～高峰温泉～池の平口～地蔵峠～
湯の丸キャンプ場（約9km、テント泊）

2日目（実習） 湯の丸キャンプ場～烏帽子岳～湯ノ丸山～地蔵峠（約8km）

募集：20名（参加予定者14名、申込者25名）

第5回 雪のトレイルを歩こう

日時：2020年2月8日（土）10時～9日（日）15時

内容：1日目（実習） アサマ2000～水ノ塔山～高峰温泉～アサマ2000（約4.5km）

（机上） 雪山ミニレクチャー

2日目（実習） 車坂峠～高峰山～車坂峠～車坂山～車坂峠（約4km）

募集：20名（参加者19名、申込者30名）

■活動レポート1日目



1日目は曇り空の下スタート。目的地は第2回でも行った水ノ塔山だ。スノーシューを履いて早速出発する。スノーシュー独特の歩き方は慣れるまで難しかったが、じきにリズムカルに歩けるようになる。



歩き出してしばらくすると、雲の切れ間から青空が見えてきた。ぽかぽかと体が暖まってきたので、上着を脱ぐ。雪山では汗をかかないことが重要だ。山頂までの行程はスムーズ。2 時間ほどで山頂に到着し、昼食休憩をとった。



列から逸れて、誰も足を踏み入れていない雪面にトレースを付けるのもスノーシューの醍醐味だ。最後にはまっさらな斜面を各々気ままに歩いて、1 日目終了。我れ先にとトレースを付けて駆け下りていく参加者たちは、まるで童心に返ったかのようにはしゃいでいた。



センターに戻ってからはミニレクチャー「雪の山に登る」。いつかは自分も雪山登山を……と思っている参加者もいることだろう。雪山の特徴に始まり、行くときの注意や装備品などの紹介があった。



1 日の締めはお待ちかね、懇親会。第 4 回が中止となったこともあり、久しぶりに会う参加者たち。冬はやっぱり鍋料理！デザートに地元の三宝柑ゼリーを出すと、あちこちから「おいしい！」という声が上がった。

お酒も食事もぐんぐん進み、夜が更けるまで話し込んでいた。

■活動レポート 2 日目



2 日目は朝から吹雪だった。風が強く吹き付け、1 日目とは打って変わって悪天候。展望のない中、高峰山を目指す。立ち止まるとすぐに体が冷えてくるので、休憩は極力とらずに進んでいく。



風が強く、山頂滞在時間はごくわずか。高峰山での昼食は断念し、下りてくると鳥居がお出迎え。例年なら鳥居の「高峰神社」の文字が隠れるほどに積もっている雪も、この少なさ。今冬の暖かさを物語っていた。



車坂山の下りで急斜面を利用した滑り台を楽しみ、樹林帯で昼食をとり、下山。トレースの付いていない所をざくざくと歩み進めていく参加者もあり、ここ 1 日でのスノーシューの上達ぶりがうかがえる。

今回、好天と悪天の両方を体験し、雪山の魅力と恐ろしさ、どちらも知る良い機会となった。

■参加者の声（アンケートより）

- *初めての雪山歩き、好天と吹雪の両方体験できた。夏に歩いたコースを冬にも歩き、冬でないと見られない景色を満喫した。
- *天気は大変だったが、普段では体験できないことが体験できた。
- *「ザ・冬山」という天気で勉強になった（2 日目について）。
- *スノーシューの取り扱いや歩き方、登り方、下り方など具体的な説明がもっと欲しかった。

番外編 トレイル歩きのカラダを作ろう

日 程：2020 年 3 月 21 日（土）～22 日（日）

内 容：1 日目（机上） トレーニングの必要性（山口章氏）

トレイルに必要な体力や筋力、体に与える影響 など

（手塚啓佑氏、土屋陽介）

（実習） 体力測定、歩き方チェック、トレーニング など

2 日目（実習） 浅間・八ヶ岳パノラマトレイルの一部（約 10km）

歩き方チェック、準備運動、クールダウン、道に合わせた歩き方など

募 集：20 名（申込者 26 名）

講 師：手塚啓佑氏、土屋陽介氏（浅間南麓こもろ医療センター 理学療法士）

■講師プロフィール

手塚 啓佑（てづか けいすけ） 浅間南麓こもろ医療センター 理学療法士

上田市出身、35 歳。

好きな山は槍ヶ岳、これから登りたい山は剣岳。

【一言】

夏山限定ですが、登山が大好きです！

一緒に学んで、たくさん登山のお話をしましょう。



土屋 陽介（つちや ようすけ） 浅間南麓こもろ医療センター 理学療法士

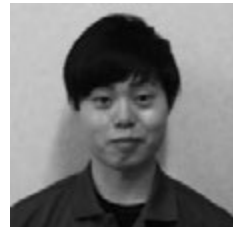
佐久市出身、27 歳。

好きな山は奥穂高岳、これから登りたい山は槍ヶ岳。

【一言】

登った山の百名山バッジを集めていて、百名山制覇が目標です！

健康的に、楽しくアウトドアを楽しみましょう。



※新型コロナウイルスの感染拡大防止のため中止

⇒事態の収束を待ち、再度企画・開催を検討する

トレイルを活用した実証実験事業 大人のトレイル歩き旅講座

■趣旨：ロングトレイルを活用したモデル事業の一環として行い、成果やノウハウなどの情報を発信し、歩く機会の創出に寄与することを目的とする。ロングトレイルと様々な専門テーマを組み合わせたモデル事業が普及することで、各地でトレイルを活用した新たな取り組みにつながることを期待できる。

■広報

- * 安藤百福センターHP など Web 媒体を活用
- * 首都圏および長野県内のアウトドア用品店（約 70 店舗）にチラシ発送
- * 長野県内のマスコミにプレスリリース
- * トレイル関係団体および地元観光業者からの発信

→日本ロングトレイル協会、ヤマケイオンラインなど、アウトドア・観光関係の Web に掲載

第 1 回「シェフから学ぶソトゴハン（夏ごはん編）」

日 時：2019 年 5 月 25 日（土）13 時～26 日（日）15 時

講 師：鴨川 知征（イタリア料理シェフ、浅間兄弟代表）

神奈川県出身。信州・小諸発信の料理ユニット「浅間兄弟」代表 & 洋担当シェフ。東京のイタリア料理店にて勤務後、2016 年に長野県小諸市へ I ターン。移住担当の小諸市地域おこし協力隊を兼務し、任期終了後は市内にレストランをオープン予定。得意な「食」を通しての地域おこしを模索中。



参加費：5,000 円 宿泊・食事代：3,000 円

募 集：20 名（参加者 15 名、申込者 18 名）

■参加者属性

男 女 比	1 : 2（男性 5 名 女性 10 名）
平均年齢	45 歳
年 代 層	30 代 4 名、40 代 7 名、50 代 2 名、60 代 2 名
居 住 地	長野 4 名、東京 6 名、埼玉 4 名、群馬 1 名

■活動レポート 1 日目



3 年目となるソトゴハン講座。テーマは夏のトレイルで楽しめる料理だ。鴨川シェフから道具の紹介やパッキング、食材の選び方など基本的な考え方について教わる。



アイスブレイクとして、まずは一品ワンバーナーで料理を作ってみる。日持ちのする夏野菜を使ったナポリタンだ。バーナーの使い方や注意点も含めて解説。



お腹を満たした後は、今回の本題に入る。テーマは「燻製」。熱燻や温燻の違い、チップの種類などを実際に作りながら学ぶ。豚肉とニシンを燻し、翌日のトレイルで作る料理のベースにする。



翌朝の仕込みも併せて行う。野菜や海産物など様々な乾物を水に浸し、滋養たっぷりの出汁を作る。トレイルを歩く前にザックに入れ、食べるときには出汁が出ているといったアイデア・レシピ。



お楽しみの懇親会。普段は参加者が協力して作るのだが、この日はシェフ主導でプロの料理を味わうことができた。様々な燻製をベースにした創作イタリアンの数々に、皆満足していたようだ。



懇親会メニュー：

ドライフルーツのスパイシーチャツネ、クイックマッシュとニシンのスモークサラダ、アヒージョ after ペペロンチーノパスタ、山パエリア、豚肩ロース BBQ

■活動レポート 2 日目



朝ごはんは中華風海鮮粥。昨日の乾物出汁を使い、短時間で簡単に作ることができた。懇親会でもたれた胃に優しい味だ。



トレイルで食べるソトゴハンの準備。シェフが考案した味噌玉ならぬ「パスタ玉」。味付けのベースに 2 種類用意して、各自パッキングした。



千曲川コースの一部を歩く（約 11km）。
5 月とは思えない夏日のような気温だった。田植えを終えたばかりの田園風景を眺めると、いくらか暑さが和らいだ。



小諸大橋記念公園でソトゴハン・タイム。
各自がワンバーナーを使い、燻製を使ったパスタを作る。



10 分ほどで完成。燻製豚のカルボナーラ（上）と、燻製ニシンのシチリア風スパゲッティ（下）だ。燻製さえできれば、気軽に作れるレシピだったので、今回の学びを自分なりにアレンジして、ソトゴハンを楽しんでもらいたい。この後は懐古園まで歩き、解散した。

■参加者の声（アンケートより）

- *トレイル歩きはとても暑かったが、おいしいソトゴハンが楽しめた。
- *1つのテーマ（今回は燻製）でいろいろな料理ができるのが良い。
- *欲を言えば、コンビニなどで買える素材を活用したレシピがあってもよかった。

■総合評価

昨年度のペミカン・ベースの料理に続き、燻製をテーマにして料理に幅を持たせたのが好評だった。家庭で燻製を簡単にできるコツを、もう少し伝えてもよかった。

■購入品

- ・調味料ケース、ウェット・ティッシュ（ともに参加者への配布物）

■参加者持ち物

- ・筆記用具（各自のメモ用） ・エプロン、バンダナや帽子
- ・お気に入りの調理道具（ある人） ・トレッキングシューズや運動靴
- ・動きやすい服装 ・ザック

■主催者準備物

- ・調理用品 ・食材

第2回「実践！相手に伝わる風景撮影術（初夏の花編）」

日 時：2019年6月1日（土）13時～2日（日）15時

講 師：山本 啓一（一般社団法人日本写真講師協会認定講師、

公益社団法人日本写真協会会員、フォトマスター検定エキスパート）

撮影ジャンルは風景全般。森の中を歩きながら撮影することが好きで、ハヶ岳に移住。自然の中で何か面白いもの、楽しいものはないかと探している。「分かりやすく、楽しく」をモットーに、上級者を目指す方から初心者の第一歩にも対応。



参加費：5,000 円 ※宿泊・食事代は希望者のみ別途

募 集：20 名（参加者 10 名、申込者 10 名）

■参加者属性

男 女 比 2：1（男性 7 名 女性 3 名）

平均年齢 49 歳

年 代 層 30 代 3 名、40 代 1 名、50 代 5 名、60 代 1 名

居 住 地 長野 7 名、東京 2 名、埼玉 1 名

■活動レポート 1 日目



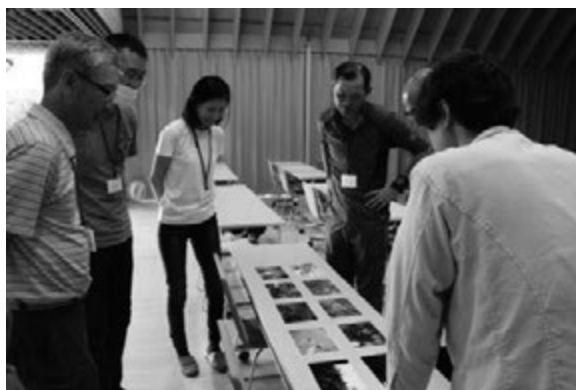
室内でのレクチャーから始まり、写真の基礎を学ぶ。スライドを見ながら、撮影のポイントを解説。あれもこれもではなく、主役を意識することが大切だ。



外に出て花を撮る練習。鵜久保集落の森を抜け、眺めの良い御牧ヶ原台地まで上がる。



初のドローン登場。室内で飛ばし、動画や写真を撮ってみる。空撮の魅力に取りつかれてしまいそうだ。



1 日目のベスト写真を出し合い、プリントして講評。画面で見ると印刷して見るのでは、印象が全く違うことに気付く。



懇親会メニュー：

ビア缶チキン、燻製ホタテのサラダ、タコアボカド、燻製スパムのピンチョス、カマンベールチーズのスモーキーフォンデュ、燻製アジの和風パスタ、かき氷

■活動レポート 2 日目



中軽井沢駅まで移動し、軽井沢コース（未開通）の一部トレイルを歩く。離山で新緑の森を撮るポイントを学び、思い思いの素材にシャッターを切った。



軽井沢の景勝地、雲場池にて水のある風景を撮る。講座の最後に行うフォトコンテストに向けて、ラストスパート。



軽井沢駅舎内で、コンテスト開催。講師の講評も交えながら、優秀者を決める。この2日間の成果で、撮りたい絵が伝わるような写真が多かった。

■主な参加者評価（アンケートより）

- *なんとなく撮影していた被写体の捉え方や技が学べて勉強になった。
- *ほかの参加者の写真が見られてよかった。
- *写真を撮る時間、選ぶ時間がもう少し欲しかった。

■総合評価

3年目となるが、参加者が少なかったので、一人一人の要望や質問に講師の対応が追い付いていた。カメラを扱う講座は、10名ぐらいがちょうど良いかもしれない。

■参加者持ち物

- ・一眼レフ、またはミラーレスカメラ
- ・三脚
- ・運動靴またはトレッキング・シューズ
- ・動きやすい服装、レインウェア
- ・ザック（ザックカバーも）
- ・水筒

■主催者準備物

- ・写真用紙（A4、2Lサイズ）
- ・プリンター2台

第3回「自然の見かたが変わるネイチャートレッキング」

日 時：2019年10月12日（土）13時～24日（日）12時

→台風19号の影響により中止（定員20名満員）

講 師：杉山 隆（October Deer 代表、信州登山案内人）

埼玉県出身。国際自然環境アウトドア専門学校卒業。哺乳類を筆頭に生き物大好き。動物の頭骨や毛皮を多数所持。昔はカモシカにお熱だったが、フィールドを八ヶ岳に移してからはニホンジカをメインにインタープリテーションを行っている。趣味はスノーボード、クライミング、コーヒー、読書、野外料理、車中泊。最近はキノコにハマる。



■申込者属性

男 女 比	1 : 1（男性 10 名 女性 10 名）
平均年齢	52 歳
年 代 層	30 代 3 名、40 代 6 名、50 代 4 名、60 代 5 名、70 代 2 名
居 住 地	長野 2 名、東京 6 名、神奈川 2 名、千葉 1 名、埼玉 1 名、茨城 6 名、愛知 2 名

第4回「手書きで残すトレイルノートの作り方」

日 時：2019年11月23日（土）13時～24日（日）13時

講 師：江村 康子（グラフィック・デザイナー、手書き地図推進委員会公認手書き地図作家）

新潟県出身。結婚をきっかけに長野県へ移り、現在は佐久市在住でフリーランス。紙モノをメインにデザインの仕事をしているが、最近はイラストを使って手書き地図や絵メモを書いたりすることが増えた。身近にあるもので記録を残していく「気軽さ」を一緒に楽しみたい。「教えて！ドクター」という医療サイトをデザイン。グッドデザイン賞とキッズデザイン賞をダブルで受賞。



参加費：5,000 円 文具代：1,495 円（実費） ※宿泊・食事代は希望者のみ別途
募 集：20 名（参加者 10 名、申込者 15 名）

■参加者属性

男 女 比	1：2（男性 3 名 女性 7 名）
平均年齢	49 歳
年 代 層	30 代 1 名、40 代 5 名、50 代 3 名、60 代 1 名
居 住 地	長野 5 名、東京 4 名、埼玉 1 名

■活動レポート 1 日目



トレイルを歩いた記録を残したい 10 名が集まって開催。昨年度より画材と内容が大幅に変更された。



画材の使い方練習でミカンを書く。飾り文字、吹き出し、枠付けなどのテクニックを学んだり、レイアウトを考えながら、より記憶に残り、伝わるトレイルノートづくりにつなげる。



1日のまとめとして、自己紹介でノートを書いてみた。それぞれの個性が際立つ内容となった。



懇親会メニュー：ビア缶チキン、もみじ鍋、長芋のさっぱり塩昆布和え、キュウリとワカメの酢の物、燻製ししゃも、枝豆、リンゴ

■活動レポート 2 日目



ノート作りのネタを集めに、センターから北国街道まで歩く。石垣、瓦、塀など、普段は素通りしてしまうようなものでも、注意して見ることで見方が変わるようだ。



懐古園に到着し、穴城のいわれを、古地図を見ながら解説。停車場ガーデンや本町まちや館でも、それぞれのスタッフに歴史や経緯などを語ってもらった。ノートづくりのネタは十分に集まったようだ。

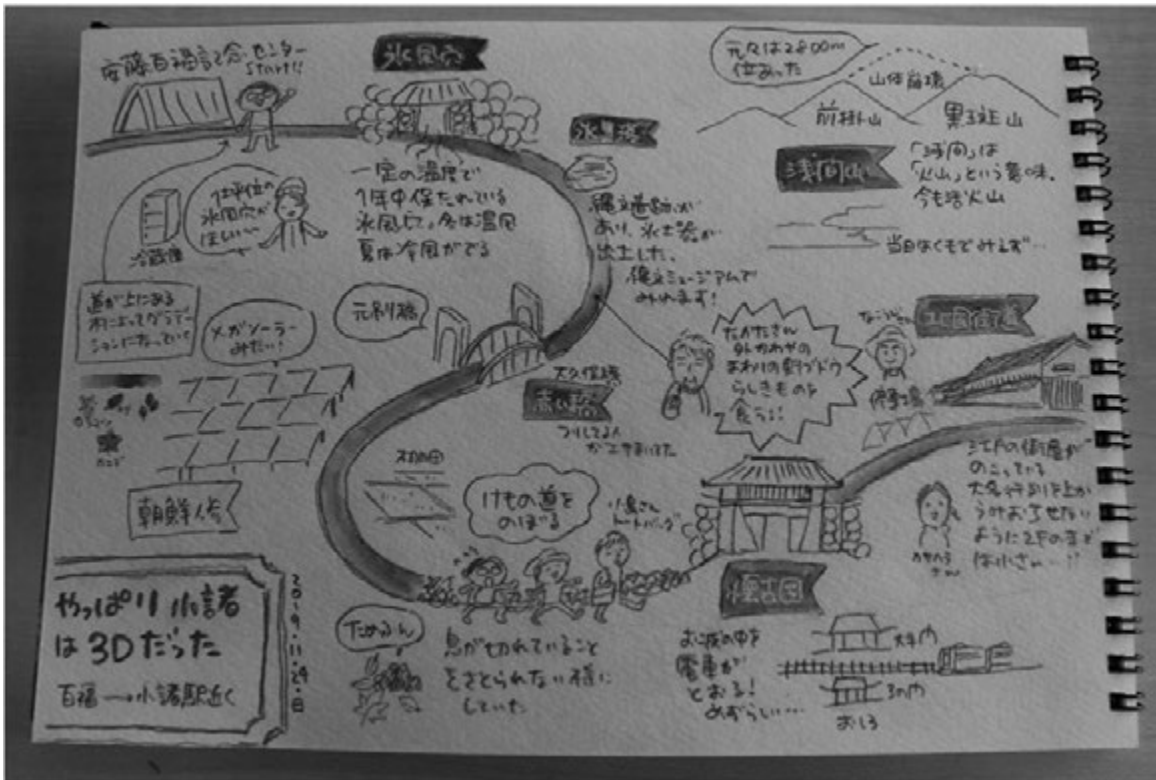


センターに戻ってからはノートづくりの時間。1時間しかないので、集中して書く。



完成后、皆で作品を披露し、講師から講評を受ける。同じトレイルを歩いても、見てきたものや表現の仕方に個性があり、どれも素晴らしいノートになった。

■トレイルノート（講師制作）



■主な参加者評価（アンケートより）

- * コツを教えてもらいながら実践できたのが良い。
- * アドバイスを受けてやってみると、意外と敷居は低く楽しかった。
- * もう少しノートを書く時間が欲しかった。

■総合評価

昨年に続き、イラストレーターがアウトドアの講座を行う試みだったが、さらに内容（レクチャー・画材の選択）が充実しており、完成度の高いノートづくりを学ぶことができた。写真講座と同じく、一人一人フォローするために10名ぐらいの参加が望ましいだろう。

■購入品

- ・ 呉竹 CLEAN COLOR Real Brush ・ 呉竹水筆ペン ・ マルマンスケッチブック
- ・ 三菱鉛筆ユニボール Signo 白 ※1人に付き 1,495 円（参加者実費精算）

■参加者持ち物

- ・ 筆記用具（各自のメモ用） ・ カメラ機能の付いた携帯電話またはカメラ
- ・ トレッキングシューズや運動靴 ・ 動きやすい服装、防寒着 ・ ザック

■主催者準備物

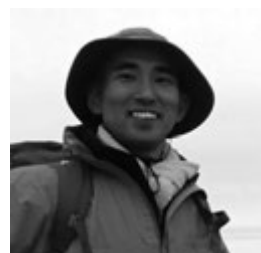
・プロジェクター ・スクリーン ・トレイルマップ（コピー）

第 5 回「大地の見かたが変わるジオトレッキング」

日 時：2019 年 12 月 14 日（土）13 時～15 日（日）13 時

講師：竹下 欣宏（信州大学教育学部准教授）

愛知県新城市出身。2004 年 3 月、信州大学大学院博士課程を修了。栃木県立博物館、戸隠地質化石博物館、信州大学教育学部助教を経て 2012 年より現職。地球の歴史の中で一番新しい時代の地層（第四紀）や岩石を対象として、大地の生い立ちを読み解く研究をしている。



参加費：5,000 円 ※宿泊・食事代は希望者のみ別途

募 集：20 名（参加者 17 名、申込者 25 名）

■参加者属性

男 女 比 2：3（男性 7 名 女性 10 名）

平均年齢 59 歳

年 代 層 40 代 5 名、50 代 4 名、60 代 5 名、70 代 3 名

居 住 地 長野 6 名、東京 5 名、埼玉 1 名、茨城 5 名

■活動レポート 1 日目



布引林道を抜けて布引観音へ向かう。斜面に現れた石を取り出し、どこからどのように来た石なのか推測する。石の基本的な知識があれば、大体の予測は付くようだ。



布引観音に到着後、岩壁の縞々に着目。部分的に縞々がずれている箇所があり、これはかつて地震が起こったことが原因だと言う。地層の記憶というものは、私たちに驚きを与えてくれる。



異なる大きさの石を詰めたペットボトルを激しく振って、沈殿の様子を確認する実験。落ち着くと、きれいな層ができていた。



センターに戻ってからは、浅間連峰や御牧ヶ原台地周辺の成り立ちや関係性について解説。浅間山がどうやって今の形になったのか、噴火の話を交えて教わることができた。



懇親会メニュー：漬物２種、燻製アジのクリームソースディップ、ポテトサラダ、タコの塩レモンカルパッチョ、野沢菜鍋、豚肩ロースの塩釜焼き、鹿肉のラグーソースパスタ、ほか差し入れ多数（忘年会を兼ねて行ったので、特別多かった）。

■活動レポート 2 日目



小諸に唯一現存していた吊り橋である大杭橋（2019 年の台風 19 号により一部流失）付近に移動し、まずは台風による川の侵食を解説。写真の模様から、どのような流れがあったのかを推測。



地層の下部には数百万年前の地層があった。その昔、アケボノゾウという生物が存在していた時代のようなのだ。



千曲川コースの一部を歩き、懐古園へ。展望台から 1 日目の布引観音周辺、2 日目の千曲川流域の地形を見渡し、まとめを行った。

■主な参加者評価（アンケートより）

- *石についてもっと特化して行って欲しい。
- *トレッキング中に見る地層や崖などが気になっていたのも、見方の知識が得られた。
- *専門用語をあまり使わず、説明がとても分かりやすかった。

■総合評価

台風 19 号の影響で通行止めのトレイルがあり、道選びに苦労した。ただ、昨年と同じく講師の説明が初心者でも理解しやすい内容だったのが、高評価につながったようだ。事前に学習できる参考文献を知らせてあげると、より理解が深まりそうだ。

■参加者持ち物

- ・トレッキングシューズや運動靴 ・双眼鏡（あれば）
- ・動きやすい服装、防寒着（手袋やニット帽など含む）・ザック（防寒着が入るサイズ）

■主催者準備物

- ・プロジェクター ・スクリーン

みんなでダイヤモンド浅間を見に行こう！

■趣旨：浅間山の新たな魅力を発掘するとともに、地元住民が地元の山に親しみ、山への感謝の機会をつくることを目的とする。浅間山の山頂と朝日が重なり、ダイヤモンドのように輝く神秘的な現象は神々しく、感動せずにはいられない光景となる。

■広報

- ・安藤百福センターHP など Web 媒体を活用
- ・小諸市や浅間山ジオパーク推進協議会などにチラシ配布
- ・長野県・群馬県内のマスコミにプレスリリース
- ・トレイル関係団体および地元観光業者からの発信

→浅間山ジオパーク推進協議会、こもろ観光局、日本ロングトレイル協会、全国山の日協議会等、アウトドア・観光関係の Web に掲載

日の出編①

日 時：2019 年 8 月 11 日（日・祝）3 時～7 時

場 所：槍ヶ鞘（黒斑山）

参加費：1,000 円

募 集：30 名（申込者 28 名）

→噴火による登山道規制のため中止

■申込者属性

男 女 比 1 : 1（男性 13 名 女性 15 名）

平均年齢 50 歳

年 代 層 10 代 2 名、30 代 1 名、40 代 10 名、50 代 9 名、60 代 5 名、70 代 1 名

居 住 地 長野 23 名、群馬 2 名、埼玉 3 名

日の出編②

日 時：2019 年 8 月 25 日（日）3 時～7 時

場 所：トーマの頭（黒斑山）

参加費：1,000 円

募 集：30 名（参加者 15 名、申込者 18 名）

■参加者属性

男 女 比 1 : 4 (男性 3 名 女性 12 名)
平均年齢 48 歳
年 代 層 20 代 1 名、30 代 1 名、40 代 5 名、50 代 7 名、60 代 1 名
居 住 地 長野 13 名、群馬 1 名、東京 1 名

■活動レポート



8 月 7 日の小規模噴火により噴火警戒レベルが引き上げられ、開催が危ぶまれた（11 日は中止）が、19 日に緩和されたため決行。期待に胸を膨らませて夜道を登る。



絶好の展望地・トーミの頭に到着すると、眼前には前掛山が迫り、東の空が明るみ始めていた。そして、その瞬間が訪れると、あまりの神々しさに皆言葉を失った……。



今回は噴火から間もなかったため、直前の申し込みは伸びず、キャンセルも出たが、諦めずに参加した方には幸運が待っていた。天候だけでなく噴火の状況にも左右されるが、今後も続けていきたい。

日の入り編

日 時：2019 年 11 月 1 日（金）13 時～18 時

場 所：浅間牧場

参加費：1,000 円

募 集：30 名（参加者 20 名、申込者 24 名）

■参加者属性

男 女 比 1：2（男性 7 名 女性 13 名）

平均年齢 61 歳

年 代 層 30 代 2 名、50 代 5 名、60 代 7 名、70 代 6 名

居 住 地 長野 12 名、群馬 4 名、埼玉 3 名、東京 1 名

■活動レポート



台風 19 号の影響が懸念されたが、幸い浅間牧場周辺に被害はなかったため催行。まずはガイドの説明に耳を傾けながら、牧場の道をのんびりと歩く。



目的地の天丸山にたどり着くと浅間山の全景が望め、いよいよ期待が高まる。ところが、太陽が沈もうとするそのとき、にわかに雲が迫ってしまい……、このツアーの難しさを痛感させられた。

■総合評価

今回は比較的天候に恵まれたが、噴火により中止を余儀なくされたり、また、その瞬間に雲が出るなど、やはり一筋縄ではいかなかった。このツアーは依然ニーズが高いものの、4 年目を迎えて集客にもやや陰りが出てきたので、開催方法など見直す必要がある。

みんなでパール浅間を見に行こう！

■趣旨：浅間山の新たな魅力を発掘するとともに、地元住民が地元の山に親しみ、山への感謝の機会をつくることを目的とする。浅間山の山頂に満月前後の月が懸かり、パールのように淡く輝く神秘的な現象は、太陽が懸かる「ダイヤモンド浅間」と比べてチャンスが非常に少なく、年に1～2日程度しか見られない。

■広報

- ・安藤百福センターHP など Web 媒体を活用
- ・小諸市や浅間山ジオパーク推進協議会などにチラシ配布
- ・長野県・群馬県内のマスコミにプレスリリース
- ・トレイル関係団体および地元観光業者からの発信

→浅間山ジオパーク推進協議会、こもろ観光局、日本ロングトレイル協会、全国山の日協議会等、アウトドア・観光関係の Web に掲載

月の入り編

日 時：2019 年 5 月 19 日（日）2 時 30 分～7 時

場 所：浅間牧場

参加費：1,000 円

募 集：30 名（申込者 40 名）

→曇天のため中止

■申込者属性

男 女 比 1：2（男性 14 名 女性 26 名）

平均年齢 55 歳

年 代 層 20 代 1 名、30 代 3 名、40 代 6 名、50 代 12 名、60 代 17 名、70 代 1 名

居 住 地 長野 25 名、群馬 5 名、愛知 4 名、埼玉 4 名、東京 2 名

月の出編

日 時：2019 年 10 月 13 日（日）14 時 30 分～19 時 30 分

場 所：黒斑山

参加費：1,000 円

募 集：30 名（申込者 30 名）

→台風 19 号の影響により中止

■申込者属性

男 女 比 2：3（男性 12 名 女性 18 名）

平均年齢 44 歳

年 代 層 10 代 3 名、20 代 5 名、30 代 1 名、40 代 6 名、50 代 9 名、60 代 5 名、
70 代 1 名

居 住 地 長野 17 名、群馬 5 名、愛知 3 名、埼玉 2 名、東京 2 名、神奈川 1 名

■総合評価

月の出・月の入りともに人気が高く、ニーズの高さを改めて確認することができた。しかし、今回も天候に恵まれず、開催条件の厳しさ（パールの瞬間に晴れていなければならない）を再認識することとなった。



パール浅間の画像（2017 年度）

子どもクライミング教室

■趣旨：安藤百福センターに設置されたクライミング・タワーを活用し、ガイド指導のもとでクライミング体験を行い、アウトドアに興味を持つきっかけづくりとする。クライミングは子どもの体の鍛錬に留まらず、精神力や想像力を育む効果があるとされており、豊かな人間形成に資するものである。

■広報

- ・安藤百福センターHP など Web 媒体を活用
- ・小諸市内の小学校にチラシ配布
- ・東信地域のスーパーマーケットにてチラシ掲示
- ・長野県内のマスコミにプレスリリース

→こもろ観光局、全国山の日協議会等、アウトドア・観光関係の Web に掲載

インストラクター：船山 潔（アルパイン・クライマー）

1995 年生まれ、長野県出身。

高校生の時代にクライミングを始め、20 歳のときに渡仏。ヨーロッパ・アルプスに魅了され、アルパイン・クライミングを始める。現在は日本、海外問わず、夏は登山、フリー・クライミング、冬はアルパイン・クライミング、バックカントリー・スノーボードを楽しむ。Karrimor アンバサダー。



日 時：2019 年 10 月 5 日（土）

11 月 9 日（土）

①10:00～11:30 ②13:00～14:30 ③15:00～16:30

参加費：500 円

募 集：各回 10 名 計 60 名（参加者 66 名、申込者 101 名）

■参加者属性

男 女 比 1：1（男性 33 名 女性 33 名）

平均年齢 9 歳

年 代 層 小学生のみ

居 住 地 長野のみ（小諸 40 名、佐久 9 名、東御 6 名、御代田 6 名、
上田 3 名、長野 2 名）

■活動レポート



高さ 7m のクライミング・タワーに登ろうと、ワクワクが止まらない子どもたち。まずはインストラクターが見本を見せ、登り方や降り方のコツを伝授する。



そして、いざ実践！となると思いのほか高く、怖気付きそうになるが、皆に励まされ、次々に登っていく。一番上まで到達したときの達成感は格別だ。



要領が分かってきたら、さらに難易度の高いコースに挑戦。夢中になって、時間の許す限り登り続ける子どもたちであった。

■参加者の声（アンケートより）

- *インストラクターの先生がとても良かった。安全面がしっかりしていて安心だった。
- *とても丁寧に教えて、褒めていただいたので、どんどん上達していた。
- *人数もちょうど良く、指導者の声や友人の声援なども聞けて、最後までやり遂げられた。

■総合評価

キャンセル待ちが多く、内容も高評価で、早くも次回開催を待ち望む声が出るほど好評であった。人数と時間は妥当であったが、親子や中高生などのリクエストも多かったので、今後の展開も検討していきたい。

森の中を歩いてトレイルノートをつくろう！

主催：小諸市文化センター（教育委員会）

共催：安藤百福センター

小学生を対象とした夏休み特別講座として企画。浅間・八ヶ岳パノラマトレイルを歩き、発見や体験したことを手書きのノートにまとめ、夏休みの自由研究として学校に提出できるといった内容だ。普段あまり行くことのない地域を歩くことによって、子どもたちが地元をより広く知るきっかけになれば、という願いも込められている。小諸市民向けのカルチャー・スクールを多数行っている文化センターと、初めての共催事業となった。

講師：江村 康子（グラフィック・デザイナー、手書き地図推進委員会公認手書き地図作家）

新潟県出身。結婚をきっかけに長野県へ、現在は佐久市在住でフリーランス。紙モノをメインにデザインの仕事をしているが、最近はイラストを使って手書き地図や絵メモを書いたりすることが増えた。身近にあるもので記録を残していく「気軽さ」を一緒に楽しみたい。「教えて！ドクター」という医療サイトをデザイン。グッドデザイン賞とキッズデザイン賞をダブルで受賞。



日時：2019年8月9日（金）9:00～16:00

参加費：500円

募集：15名（参加者17名）

■活動レポート



「トレイルノート」と聞いて、何をするのか分からず来た子がほとんどだったが、オリエンテーションで今日やることを確認。大人版のトレイルノート講座とは異なる、ふわっとした雰囲気で始まった。



作り方レクチャーの後は、布引観音コースを歩く。朝から暑い日だったが、子どもたちは頑張って歩き、気になったものの写真をたくさん撮っていた。



汗だくで天然の冷蔵庫「風穴」に入り、クールダウン。この日は 1℃ほどの冷気を体感することができ、驚きの喚声が上がった。風穴保存会にもご協力いただき、解説をしてもらった。



センターに戻って各自ノート作りを行う。イラストの書き方や構成など、講師に教わりながら制作。完成したノートを並べて、皆で眺めてみる。一人一人に講師からコメントをプレゼントした。



自然の中を歩いてみると、不思議なことがたくさんあることに気が付いたようだった。自由研究も無事に終わり、ほっとした顔付きが印象的だった。

小諸ツリーハウスプロジェクト

信州冒険ものがたり

～安藤百福センターで出来る 30 の冒険～

概要

安藤百福センターの敷地内の森には、著名なアーティストや建築家がデザインした「アートツリーハウス」が 7 棟展示されており、自然とアートとが共鳴する空間を創り出している。

ツリーハウスのコンセプトはアーティストにより様々で、チーズをモチーフにした「チーズハウス」や、太陽光パネルが設置されていて、蓄電した電力でお湯を沸かしたり光を灯したりできるツリーハウス「NEST」、手すりも壁もない板の間が、緑美しい森の中に突如として現れる「間」など、既存の枠にとらわれない、自由な発想のツリーハウスが森の中に点在している。

「小諸ツリーハウスプロジェクト」は、この森を会場として 2014 年より毎年 1、2 回開催している野外イベントで、今年で 9 回目を迎えた。「食×アート×自然」をメインコンセプトとしており、自然の素材を使った様々なアート・ワークショップ、火おこしや木登りなどのアウトドア・アクティビティ、地元で採れる旬の食材を使った料理、敷地内に造成したビオトープでの昆虫観察、野外音楽ライブなどを楽しむことができ、地元の家族連れのお客さまを中心に 1,000 名以上の来場者が詰めかける人気イベントとなっている。



イベントの目的

本イベントは、参加した子どもたちに、以下のような事柄を学んでもらうことを目的としている。

- *豊かな自然にあふれる野外でのイベントを通じ、自然の恵みや大切さを学ぶ
- *火おこし、ナイフワーク、木登り、岩登りなど、普段できない体験を通して、困難な課題に立ち向かうチャレンジ精神や自活力を養う
- *落ち葉や小枝、小石など、自然の素材を使ったアート・ワークショップを実施し、創造性を育む
- *地元で採れた旬の食材や天然素材などを使った料理を提供し、地球に優しい「食」や健康への関心を高める
- *著名なアーティストや建築家がデザインした個性的な「アートツリーハウス」や野外音楽ライブなどを通して、アートに触れる機会を提供する

今年度のイベント内容

「信州冒険ものがたり 2019 ～安藤百福センターで出来る 30 の冒険～」というタイトルで開催された今年度のイベントは、「冒険」をテーマに、火おこし、ナイフワーク、木登りや岩登り、弓矢や石器づくりなど、冒険的で楽しいアウトドア・ワークショップを約 30 種用意した。

参加者には、これらのワークショップをスタンプラリー形式で回ってもらい、集めたスタンプの数に応じてオリジナル・ギフトがもらえる仕組みとした。



ほかにも、野外音楽ライブのステージや、小諸市の旬の味覚を味わえる飲食ブース、自然の素材を使ったアート・ワークショップなど、バラエティに富んだ多数のブース出展により、世代を問わず楽しめるイベントとした。「チキンラーメン Mini」の無料試食ブースでは、用意した 800 食をすべて配布。来場者から、「屋外で食べる『チキンラーメン』は格別においしい」との声をいただいた。

当日は好天にも恵まれ、家族連れを中心に過去最高の 2,059 名のお客さまが来場し、大いに盛り上がった。





今後の展開

この「小諸ツリーハウスプロジェクト」では、自然体験活動の普及という目的とともに、地元の文化・資源を活かしたコンテンツ作りを意識し、地元の活性化および地域と都市との交流も大きなテーマとしている。本プロジェクトは、その地域に住む方をはじめ、様々な方々の関わりにより、今後も樹のように成長し続け、形を変え、枝葉を広げ続けていくプロジェクトである。これから1人でも多くの方が自発的に自然体験活動に触れ合い、また、発展させようとする行動へつながることを願っている。

(文責) 日清食品ホールディングス株式会社 広報部 CSR 推進室

～事務局スタッフ近況～

■安藤 伸彌（あんど う のぶや）



4歳の息子が戦隊モノにハマリ、家では戦いを強いられる毎日が続いています。おもちゃを買いたい、ヒーローショーを見たい！と高まる欲求を抑えて放送が終わったと思ったら、新しい戦隊が始まり……いつまで続くかと戦々恐々の日々です。

一方、親子ともにハマったのが「びじゅチューン！」。美術の名作をユニークな歌とアニメで紹介する番組で、見るとクセになる面白さ。ワールドトレイルズカンファレンス鳥取大会で訪れた三徳山の投入堂や、国東半島峯道トレイルの起点・熊野磨崖仏も作品になっていて、美術に親しむきっかけになっています。

■小島 真一（こじま しんいち）



2020年のテーマは「肉体改造」。週3で休肝日を設けて、晩酌の時間を筋トレに変え、愛読書も山の雑誌からター〇〇に変わるほど本気の状態が、正月から2週間ぐらい続きました。今では継続の難しさを実感しています。ともあれ、大好きな山には登りつつ、ガイドのステージも一段階上げていきたいと思うアラフォー父ちゃんは、夜な夜なネットでクライミング・ギアを物色（家族には内緒）。ポチっといってしまうような理性をいつまで保てるのか、自分との果てない戦いは今年も続く。最近は日本酒が好きです！

■横堀 咲紀（よこぼり さき）



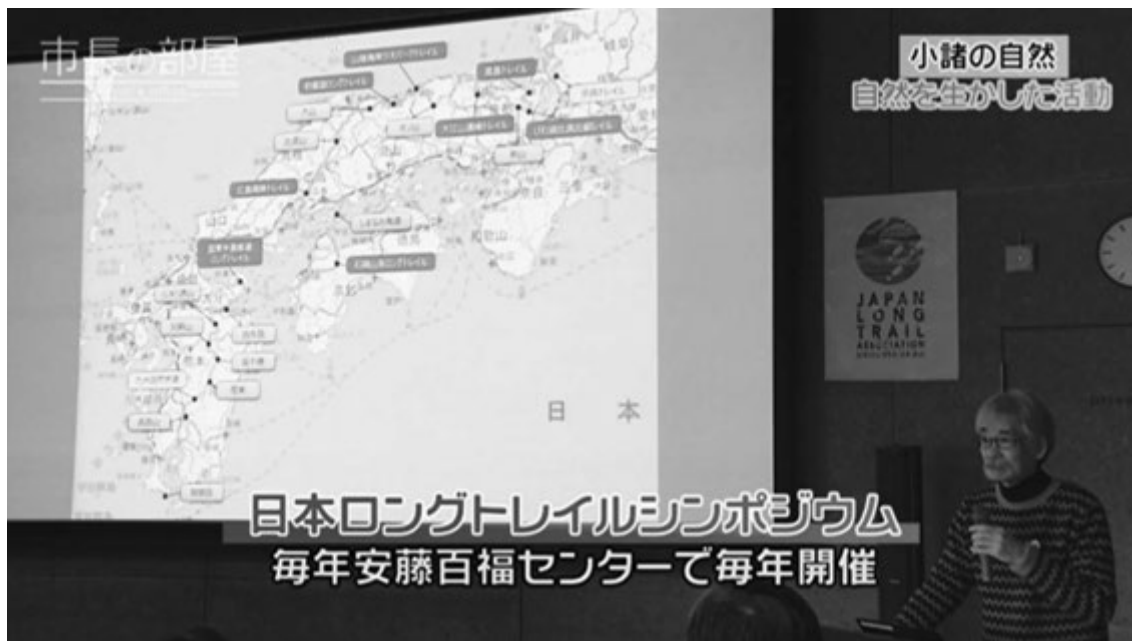
新たな推し刀ができました。恐らく個人所蔵の源清磨の鎧通し。鑑賞会で手に取らせていただき、すっかりその姿の虜になりました。次いつ見られるか、もしかするともう一生見る機会もないかもしれませんが、あの姿のように、細く（外見）、厚く（中身）、背筋を伸ばし、（お金と時間の有無はさておき）やりたいこと、学びたいことに貪欲に手を出して生きていきたいところです。とりあえず、ジム通い頑張ります。今年は運命の相手が現れる年のようなのですが、今のところその気配はなく、1年の1/3が過ぎてしまいました。お心当たりのある方、お待ちしております。

卷末資料

マスコミ掲載（一部）

■コミュニティテレビこもろ「小諸の自然」（2019年6月30日）





■コミュニティテレビこもろ「ツリーハウスプロジェクト紹介」(2019年12月15日)



■『男の隠れ家』(2020年3月号)

2

アーティストたちが造った様々な作品
気軽に楽しめるツリーハウス

ツリーハウスの形はひとつではない。
あらゆるジャンルのアーティストたちが造った
発想豊かなツリーハウスが大集合。

信州のユニークなツリーハウス

子ども時代のイメージをそのままに

プレイセットプロダクトによる作品。テーズを食べながら中に入って暮らすという発想豊かなツリーハウス。

鳥の目線をイメージ

山休の茶屋のオマージュ

鳥にみるイメージ

自然の中に作られた「間」

鳥と距離が近づくデザイン

長野県 自然とアートが融合する場所
安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター
(略称:安藤百福センター)

自然体験活動などのために造られた専門施設。センター内には自由な発想でデザインされたアートツリーハウスが点在。無料で楽しめる上に各棟で雄大な浅間連峰を望むことができる。

長野県小諸市大久保1100
☎0267-24-0825 入場料/無料 営業時間/9:00~17:00 定休日/火曜、年末年始
アクセス/JR小諸駅より車で10分 備考/年に一度のイベントでツリーハウスに入ることができる。常時ツリーハウスは見学のみ。

Noma Bariによる作品。2枚の窓から鳥をイメージして造られ、中からは小諸の景色を見渡すことができる。

古谷誠章が制作した「又庵」。人々が手塩にかけた豊かな森と食の世界を結び付けた魅力的なデザイン。

KANKAPILAデザイン。オオムラサキをモチーフにして造られた。

佐藤可士和作の「間」。静謐で清々しい、シンプルな作品だ。

佐藤オオキ作。バードハウスが78個集まってできた。

LOCAL PROJECT CATALOG 100



045

長野県

小諸ツリーハウスプロジェクト

ツリーハウスを
きっかけに自然体験を。

長野県小諸市にある自然体験・アウトドアの指導者を養成する『安藤百福センター』が運営する、クリエイターが異なるコンセプトで造った7棟のアートツリーハウス。自然に普段接しない人でも、アートをきっかけに自然体験に興味を持って欲しいとの願いがある。ツリーハウスを観賞しながら楽しめる屋外イベントも開催する。

事務局職員の小島真一さんに聞きました！

Q. プロジェクトにはどんな方が参加していますか？



ツリーハウスをデザインしてくれたクリエイターや、施工会社の方々。年1度のイベントの運営をしてくれる地域の方々や、学生ボランティア、企業の方々为中心です。イベント当日のスタッフも募集中です。

① 安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター ② 2011年

③ www.momofukucenter.jp/treehouse

④ 30歳代～40歳代 ⑤ 有

安藤百福センター 運営組織

顧問

荒牧 重雄	東京大学名誉教授、火山学者
荻原 健司	スキーノルディック複合五輪金メダリスト
林 貞行	元外務事務次官、元駐英特命全権大使
丸山 庄司	元全日本スキー連盟 専務理事

運営委員会

委員長	安藤 宏基	公益財団法人安藤スポーツ・食文化振興財団 理事長 日清食品ホールディングス株式会社 代表取締役社長・CEO
副委員長	安藤 徳隆	公益財団法人安藤スポーツ・食文化振興財団 副理事長 日清食品ホールディングス株式会社 代表取締役副社長・COO
委員	安藤 昭一	千葉大学 名誉教授
	小泉 俊博	小諸市長
	中村 達	アウトドアジャーナリスト・プロデューサー 特定非営利活動法人日本ロングトレイル協会 代表理事 安藤百福センター センター長
	水野 正人	ミズノ株式会社 相談役会長

諮問委員会

委員長	節田 重節	特定非営利活動法人日本ロングトレイル協会 会長
	神長 幹雄	株式会社山と溪谷社 編集者
	木村 宏	北海道大学 特任教授 特定非営利活動法人信越トレイルクラブ 代表理事
	橋谷 晃	木風舎 代表
	山田 俊行	トヨタ白川郷自然学校 学校長

(50 音順、2020 年 4 月現在)

※当センターの諮問委員で、(特非)日本ロングトレイル協会理事、(公社)日本山岳ガイド協会理事長、(一財)全国山の日協議会理事長の磯野剛太氏が、2020 年 3 月 11 日ご逝去されました。享年 66 歳。ここに生前のご功績を偲び、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

2019 年度 主催・共催事業一覧

■主催

5/19	パール浅間を見に行こう！ 月の入り編（悪天候のため中止）
5/25～26	第1回大人のトレイル歩き旅講座「ソトゴハン」
6/1～2	第2回大人のトレイル歩き旅講座「写真」
8/11	ダイヤモンド浅間を見に行こう！ 日の出編（浅間山噴火のため中止）
8/25	ダイヤモンド浅間を見に行こう！ 日の出編
10/5	第1回子どもクライミング教室
10/12～13	第3回大人のトレイル歩き旅講座「ネイチャートレッキング」 (台風のため中止)
10/13	パール浅間を見に行こう！ 月の出編（台風のため中止）
11/1	ダイヤモンド浅間を見に行こう！ 日の入り編
11/3	小諸ツリーハウスプロジェクト「信州冒険ものがたり」
11/9	第2回子どもクライミング教室
11/23～24	第4回大人のトレイル歩き旅講座「トレイルノート」
12/14～15	第5回大人のトレイル歩き旅講座「ジオトレッキング」
2/23	ロングトレイルのつくり方講座（新型コロナウイルスの影響を受け中止）

■共催

	<u>特定非営利活動法人アウトドアライフデザイン開発機構</u>
6/8～9	第1回ロングトレイルハイカー入門講座「歩き方、装備」
7/27～28	第2回ロングトレイルハイカー入門講座「地図、コンパス」
9/7～8	第3回ロングトレイルハイカー入門講座「安全管理」
10/26～27	第4回ロングトレイルハイカー入門講座「テント、縦走」 (台風の影響を受け中止)
2/8～9	第5回ロングトレイルハイカー入門講座「スノーシュー」
3/21～22	ロングトレイルハイカー入門講座番外編「トレイル歩きの体作り」 (新型コロナウイルスの影響を受け中止)
8/9	<u>小諸市公民館（小諸市教育委員会）</u> 子どもトレイル教室「トレイルノート」
2/1～2	<u>公益社団法人日本山岳会</u> 第9回登山教室指導者養成講習会
	<u>特定非営利活動法人日本ロングトレイル協会</u>
2/22	第7回ロングトレイルシンポジウム (新型コロナウイルスの影響を受け中止)

2019 年度 研修利用状況

団体区分	団体数
安藤百福センター主催事業	9
安藤百福センター共催事業	5
アウトドア系団体	16
青少年教育系団体	6
環境保全系団体	3
学校・市民大学団体	8
公共系団体	4
企業系	10

計 60 団体

編集後記

新型コロナウイルスの感染が広がりを見せるなか、執筆者・関係者のお陰で無事に発行することができました。心から感謝申し上げます。◆今年度から新たに子どもを対象とした事業が始まりました。大人の講座とは異なり、自由奔放な子どもたちに大分鍛えられました（笑）。◆表紙は、浅間・八ヶ岳パノラマトレイルの御牧ヶ原コース付近、「茶房 読書の森」にある「どうらくオルガン」です。元は新潟県えちごつまりの越後妻有地域で行われている世界最大級の国際芸術祭「大地の芸術祭」で組み立てられた作品でしたが、2013年に移転されました。高さが4m以上ある小屋風のオブジェで、中にはオルガンの原理を使った音の仕掛けなどがあり、楽器としても楽しめます。◆コロナだけでなく、自然災害により事業の3割強が中止となってしまいました。悔しい気持ちは残りますが、自然のことなので仕方がないと思いながら、次に向けてまた一歩ずつ進んでいきたいと思っています。(K)

安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター
2019 年度 事業報告書

発行日：2020 年 5 月 31 日

発行人：安藤 宏基

編集人：中村 達

安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター
〒384-0071 長野県小諸市大久保 1100

Tel : 0267-24-0825

Fax : 0267-24-0918

URL : <https://momofukucenter.jp/>

E-Mail : info-center@momofukucenter.jp

